

浅羽町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ

古新田遺跡2～4次調査，貫名地B2号墳範囲確認調査
高道遺跡1次調査，光徳寺跡試掘調査 他

2002

浅羽町教育委員会

浅羽町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ

古新田遺跡 2～4 次調査，貫名地 B 2 号墳範囲確認調査
高道遺跡 1 次調査，光徳寺跡試掘調査 他

2002

浅羽町教育委員会

例 言

- 1 本書は、1990～2000年度にわたって行われた、静岡県磐田郡浅羽町浅羽地内に所在する古新田遺跡2～4次発掘調査、貫名地B2号墳範囲確認調査、サンワ化学駐車場試掘調査、高道遺跡1～2次調査、光徳寺跡試掘調査の報告書である。
- 2 現地調査は、個人住宅建設、歩道設置工事、駐車場設置工事などに先だって浅羽町教育委員会が調査主体となって実施した。報告書作成業務も同じく実施した。
- 3 試掘調査・発掘調査は1990～2000年度に実施し、報告書作成業務を2001年度に実施した。
- 4 古新田遺跡2次調査・貫名地B2号墳範囲確認調査は町単独事業として実施し、他は国庫補助事業(浅羽町内遺跡発掘調査等事業)として実施した。報告書作成業務は、町の単独事業として実施した。
- 5 2001年度の報告書作成業務の体制は次のとおりである。
調査主体者 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会 教育長 鈴木敏一
担 当 者 浅羽町教育委員会社会教育課 主任 山本義孝、嘱託員 木曾昌司
事 務 局 浅羽町教育委員会社会教育課 課長 原 利秋、係長 鈴木利征、主任 山本義孝
(文化財担当)
整理作業員 鈴木仁美、加藤順子
- 6 本書の執筆、編集は木曾が行った。第1章1古新田遺跡2次調査・貫名地B2号墳、第2章1・4、第3章1は山本が執筆した。出土遺物の実測・図版トレースは鈴木仁美と木曾、土器の復元は加藤順子、現地での写真撮影は木曾と山本が、出土遺物の写真撮影は木曾が、それぞれ分担して行った。
- 7 基準杭設定は(株)フジヤマに委託して実施した。
- 8 本書に用いた水準は海拔、方位は座標北である。
- 9 本書に用いた土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帖』に基づいた。
- 10 調査によって出土した遺物、調査に関わる諸記録は浅羽町教育委員会が保管している。

本 文 目 次

例 言

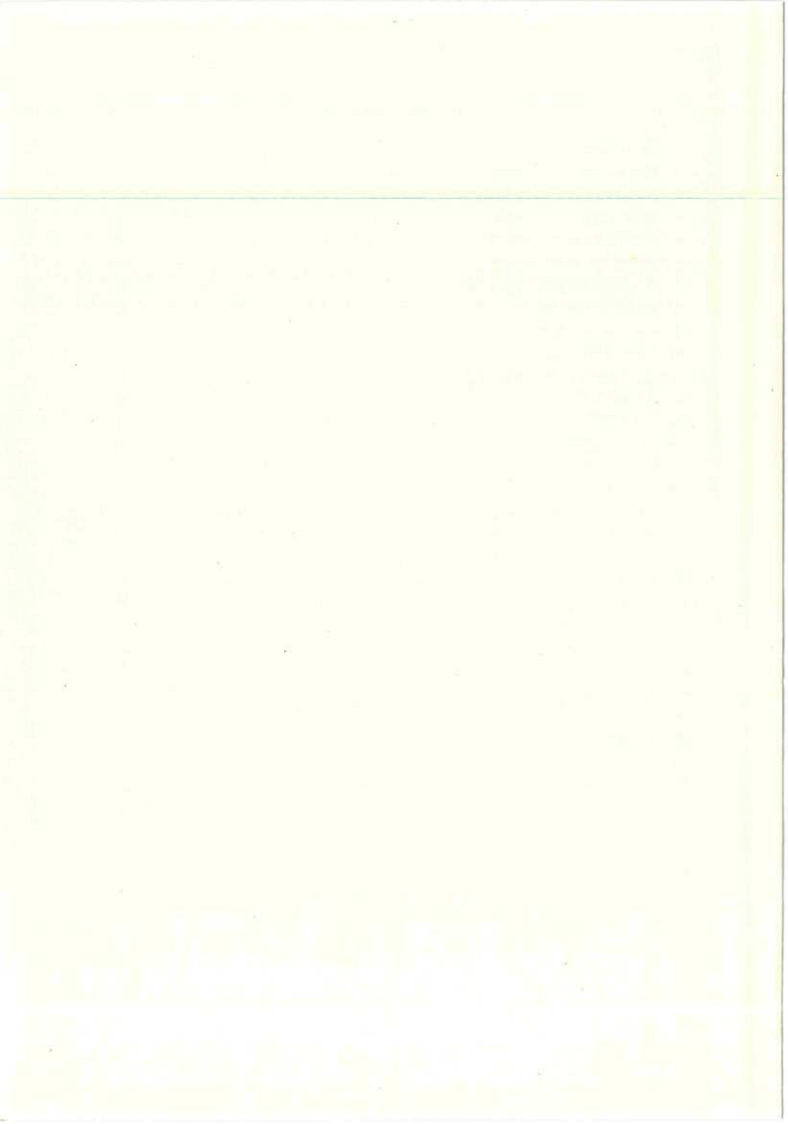
第1章 調査経過と環境	1
1 調査に至る経過と方法	1
2 環境	4
第2章 調査成果	8
1 古新田遺跡2次調査	8
2 古新田遺跡3次調査	11
3 古新田遺跡4次調査	16
4 貫名地B2号墳範囲確認調査	26
5 高道遺跡1次調査	36
6 光徳寺遺跡試掘調査	36
第3章 総 括	40

図 版 目 次

1	古新田遺跡周辺(西上空より)	
2	1. 竪穴住居跡 1	2. 墓墳
3	出土遺物	
4	古新田遺跡 3 次調査区全景(真上より)	
5	1. 竪穴住居跡 1(北より)	2. 竪穴住居跡 1, 2(北より)
6	1. 掘立柱建物跡 1(南より)	2. 掘立柱建物跡 2(北より)
7	1. 掘立柱建物跡 1. 柱穴 1 半截	2. 掘立柱建物跡 1. 柱穴 2 半截
	3. 掘立柱建物跡 1. 柱穴 3 半截	4. 掘立柱建物跡 1. 柱穴 4 半截
	5. 掘立柱建物跡 1. 柱穴 5 半截	6. 掘立柱建物跡 1. 柱穴 6
	7. 掘立柱建物跡 2. 柱穴 1 半截	8. 掘立柱建物跡 2. 柱穴 2 半截
8	1. 古新田遺跡 4 次東トレンチ整地土断面(南より)	
	2. 東トレンチ整地土除去後の地形(北より)	
9	1. 西トレンチ整地土断面(南より)	2. 掘立柱建物跡 1(南西より)
10	1. 掘立柱建物跡 2 暗渠排水(西より)	2. 掘立柱建物跡 2(西より)
11	1. 掘立柱建物跡 1 柱穴 1 基礎石、根巻石	2. 掘立柱建物跡 1 柱穴 2 半截 基礎石
	3. 掘立柱建物跡 1 柱穴 5 半截 基礎石	4. 掘立柱建物跡 1 柱穴 7 半截 基礎石
	5. 掘立柱建物跡 1 柱穴 8 半截 基礎石	6. 掘立柱建物跡 2 柱穴 1 半截 基礎石、根巻石
	7. 掘立柱建物跡 2 柱穴 2 半截 根巻石	8. 掘立柱建物跡 2 柱穴 3 半截 基礎石
12	1. 掘立柱建物跡 2 柱穴 4 半截 基礎石、根巻石	2. 掘立柱建物跡 2 柱穴 5 半截 基礎石
	3. 掘立柱建物跡 2 柱穴 6, 7 基礎石、根巻石	4. 掘立柱建物跡 2 柱穴 8 半截 基礎石、根巻石
	5. 掘立柱建物跡 2 柱穴 1 基礎石、根巻石	6. 掘立柱建物跡 2 柱穴 2 根巻石
	7. 掘立柱建物跡 2 柱穴 3 基礎石	8. 掘立柱建物跡 2 柱穴 4 基礎石、根巻石
13	1. 暗渠排水(西より)	2. 祭祀土坑
14	出土遺物 1	
15	出土遺物 2	
16	1. 貫名地 B 2 号墳の周辺(背後の学校が古新田遺跡)	2. 墳丘(上空から)
17	1. 墳丘断面(後円部)	2. 墳丘断面近景(後円部)
18	1. 墳丘断面部分	2. 後円部周溝断面
19	1. 4 トレンチ	2. 4 トレンチ遺物出土状況(左は集石墓)
20	1. 5 トレンチ	2. 1 トレンチ
21	出土遺物	
22	1. 高道遺跡 1 次調査区全景(東より)	2. 土坑 1
23	1. 光徳寺跡トレンチ全景	2. 出土遺物

挿 図 目 次

図1	浅羽町内遺跡の位置	1
図2	浅羽低地を中心とした地形概念 (S=1/50,000)	3
図3	浅羽低地を中心とする主要遺跡 (S=1/50,000)	5
図4	調査区位置図 (S=1/5,000)	7
図5	古新田遺跡2次調査区遺構図	9
図6	古新田遺跡2次調査出土遺物	10
図7	古新田遺跡3次調査区遺構全体図	12
図8	竪穴住居跡1実測図	13
図9	掘立柱建物跡1実測図	14
図10	掘立柱建物跡2実測図	15
図11	古新田遺跡4次調査区遺構全体図	17
図12	土層断面図集成	18
図13	遺構実測図	19
図14	暗渠排水実測図	20
図15	掘立柱建物跡1実測図	21
図16	掘立柱建物跡2実測図	22
図17	古新田遺跡4次調査出土遺物1	24
図18	古新田遺跡4次調査出土遺物2	25
図19	貫名地B2号墳トレンチ位置図	26
図20	貫名地B2号墳実測図	27
図21	墳丘断面図	29
図22	1・5トレンチ断面図	30
図23	4トレンチ実測図	31
図24	6・7トレンチ断面図	32
図25	出土遺物実測図	33
図26	墳丘復元図	35
図27	高道遺跡第1次調査遺構全体図	37
図28	土坑、柱穴実測図	38
図29	高道遺跡、光徳寺跡出土遺物	38
図30	光徳寺跡試掘調査トレンチ位置図	39
図31	3トレンチ位置図	39
図32	古新田遺跡とその周辺	40
図33	古新田遺跡の建物群と土坑	41



第1章 調査経過と環境

1 調査に至る経過と方法

古新田遺跡2次調査 浅羽東小学校新設に先立つ発掘調査が1989年3月から翌年3月末までの長期にわたって行われ(古新田遺跡1次調査)、調査区のほぼ全域から5世紀後半を中心とする豪族居館と推定される遺構群が見つかった。しかし、このときの調査では、館の防御施設や遺跡の広がりまでは確認されず、将来への課題として残された。

小学校の建設に伴って通学路の整備が必要となり、通学歩道の設置を行うことが計画された。教育委員会では、先の課題を埋めるような資料の収集を図るためのトレンチ調査を行うことを町建設課に申し入れ、1990年10月上旬から11月7日にかけて現地調査を実施した。

調査は、幅の狭い歩道予定地内を0.45mのバックホーで掘削可能な範囲全てにわたりトレンチを設け、遺構の有無を確認した。その結果、勤労者福祉センター(北公民館)北側と更に東約100mの地点で遺構を確認し、調査区を広げて遺構検出を行った。

古新田遺跡3次調査 1997年度に勤労者福祉センター東隣の畑(浅羽字仙海2855番地の6)で個人住宅建設の計画が持ち上がった。同地は、古新田遺跡の範囲の中に入っており、道路をはさんだ古新田2次調査地点から竪穴住居跡、土坑、柱穴などが見つかったいたので、照会地にも同様な遺構が広がっている可能性が高いと判断し、住宅建設工事に先だって7月23日から試掘・確認調査を開始した。(調査面積198m²)

バックホーによって表土、耕作土を掘削したところ、調査区全体に黒色の有機質土が広がっていたことから、これより先は人力に切り替えて、慎重に精査をおこなった。その結果、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構を検出することができた。今回の住宅の基礎工事では、遺構にまで影響が及ばないことから、主な遺構の半截に留めた。その後、S=1/20で調査区全域の遺構全体図作成、遺構個別の写真撮影、断面図作成を行った。

8月29日には(株)フジヤマに委託し、遺構全体の空中撮影を行った。全ての測量の後、遺構全体に砂を薄く被せて保護し、9月5日にバックホーで埋め戻して作業を終了した。

古新田遺跡4次調査 1999年度に浅羽東小学校南側の茶畑(浅羽字原2643番地の2)で個人住宅

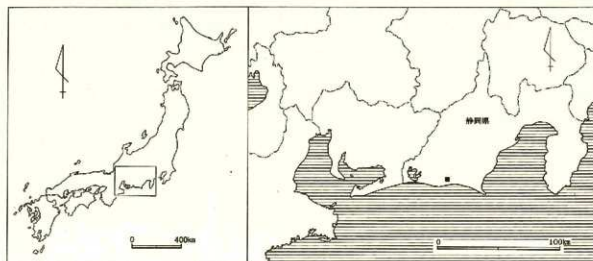


図1 浅羽町内遺跡の位置

建設の計画が持ち上がった。古新田遺跡の隣接地であったため、遺構の有無の試掘・確認調査を5月31日から行った。(調査面積184㎡ 試掘と発掘調査を含む)人力で1×4mのトレンチを数カ所設定し、耕作土を掘削した。遺構が確認出来たため、バックホーで建設予定地の周りをコの字状に掘削した。平面図・土層断面図作成、写真撮影を行い、遺構に薄く砂を被せ、バックホーで6月17日に埋め戻した。その後の計画変更で宅地部分を地表下150cm掘削し、地盤改良することになり、遺構が残らないことが確実になったため、7月27日から発掘調査を行った。試掘と発掘調査を合わせて、掘立柱建物跡2棟、整地土、暗渠排水、祭祀土坑を確認できた。記録は、S=1/20で調査区全域の遺構全体図作成、遺構個別の写真撮影、平面図・断面図作成を行った。8月15日に機材を撤収し、作業を終了した。

サンワ化学試掘調査 1997年度に浅羽字古新田2772番地の1他3筆、サンワ化学株式会社東隣の茶畑で、駐車場設置工事の届出が社会教育課にあった。古新田遺跡に隣接するため、遺構の有無の試掘・確認調査を9月16日から行った。(調査面積34㎡) 人力で2×2mのグリッドを5カ所設定し耕作土を掘り下げた。柱穴を確認したので一部拡張した。駐車場工事では地下に影響が及ばないので、遺構は掘削しなかった。19日に遺構面を砂で覆い、その上に少し土を被せて現地を開放した。

貴名地B2号墳範囲確認調査 墳丘は町道によって早くから後円部の掘が削られ、断面が露出していたが、1997年度に歩道建設工事が計画された。これによって墳丘が更に2m程削平されることから、断面観察を主体とした調査を計画した。調査は、最初に墳丘の測量を実施することから手をつけることとなり、1997年6月30日から対象地全域の伐採を進め、ここで初めて前方部の存在を確認した。

B2号墳は町内で最初に確認することのできた貴重な前方後円墳であったことから、これを機に墳丘の旧状確認と外部施設の確認を行う調査へと目的を切り替え、続行した。調査は墳丘の掘に7本のトレンチを設定し特にくびれ部では墳丘構築に伴う儀礼の痕跡を確認するという成果を収め、初期の目的を十分に達成して11月20日に終了した。

高道遺跡1次調査 1998年度に浅羽字奥林2379番地の1,2382番地の2の畑で、開発計画に伴う文化財の照会があった。同地は高道遺跡の範囲に入っており、遺構の有無を把握するために試掘・確認調査をおこなった。(調査面積184㎡) 1999年3月1日からバックホーで表土、耕作土を掘削し、人力で遺構検出作業をおこなった。その結果、溝状遺構、土坑、柱穴を検出し、一部の遺構を掘削した。

記録は調査区全景の写真撮影、S=1/20で全体の平面図・断面図作成、個別の遺構平面図・断面図作成、個別の写真撮影を行った。遺構全体を砂で覆い、バックホーで埋め戻し31日に作業を終了した。

高道遺跡2次調査 2000年度に浅羽字奥林2394番地の5,2421番地の8に所在する畑で駐車場設置の照会が社会教育課にあった。高道遺跡に隣接しているため、攪乱が行われていなければ、遺構が所在する可能性があり、試掘・確認調査を実施した。(調査面積4.5㎡) 6月21日から人力で2×0.7mのトレンチを3カ所設定して掘削した。調査の結果、攪乱が激しかったが、わずかに溝の一部が残っていた。駐車場工事では地下に影響が及ばないため、22日に埋め戻しを行い作業を終了した。

光徳寺跡試掘調査 2000年度に浅羽2308番地の5他4筆に所在する畑で、開発計画が持ち上がった。照会地は台地末端に位置し、大正まで光徳寺という寺院が建っており、遺構が残存している可能性があったので2001年1月25日から試掘・確認調査を実施した。(調査面積67㎡) 1×2～8mのトレンチを5カ所設定し人力で掘削、溝状遺構、柱穴などを確認した。2月7日から平板測量、個々のトレンチ写真撮影、断面図作成を行い、19日までに埋め戻して終了した。



図2 浅羽低地を中心とした地形概念 (S=1/50,000)

2 環境

地理的環境 磐田郡浅羽町は、静岡県西部の遠州海岸平野の東寄りに位置し、今回報告する古新田遺跡、貫名地B2号墳、高道遺跡、光徳寺跡は、小笠山丘陵西南麓の諸井台地上に所在する。

町の地形は大きく丘陵、台地、平地、海岸砂地に分けられる。最も特徴的な地形は、通称浅羽低地と呼ばれる低湿地で、それを利用して稲を栽培し、田園地帯が広がる景観が見られる。近隣市町村のなかでは有数の穀倉地帯となっている。

町の北東部は海拔264mの小笠山多聞天神社付近を最高所とする小笠山丘陵の山麓部と諸井台地からなり、町の総面積約20%を占める。町の中部から南部にかけては、自然堤防、後背低地、砂州列からなり、町の総面積約80%を占める。

縄文時代前期の縄文海進の最盛期(7,000～6,500年前)には、丘陵、台地の侵食谷まで水没し、深い入江(古磐田海)を形成していた。

その後、太田川・原野谷川が吐き出す土砂によって序々に埋め立てられ、同時に天竜川によって吐き出された砂が、海流と波によって押し戻され、海岸に平行して砂州が出来た。その後順次、南に向かって発達し砂州列となり、入江の出口を塞いだ。海水の流入が制限され、塩分の濃度が薄くなって湖沼化し、ラグーン(潟湖)を形成する。外洋の波に直接さらされることがなくなったため、河川沿いの堆積地形は保存されやすくなり、原野谷川の旧本川(古川)と旧支川(古浅羽川)の蛇行流路と自然堤防が出現した。

古浅羽川によって古磐田海が分割され、東に位置する小笠山丘陵の裾と、南の砂州列に囲まれた閉鎖性の強い水域が形成される。この水域は近世までその名残が池として残り、最後は地震に伴う地盤隆起によって消滅した。

歴史的環境 現在までのところ、町の北東部に位置する丘陵の団子塚遺跡や台地の北山遺跡から旧石器時代の石器が数点発見されている。

縄文時代にはこれらの遺跡以外に、町中部の古浅羽川の自然堤防に立地する青木遺跡、町南部の砂州列の松山遺跡、野島遺跡、八幡西遺跡、宮ノ腰遺跡、権現山遺跡でも遺物が発見されている。これまでのところ、旧石器時代、縄文時代の遺構は見つかっていないが今後の調査に期待したい。

遺構は、弥生時代中期に団子塚遺跡で総数約百基の大規模な方形周溝墓群と竪穴住居一軒、台地の北原遺跡で集落が確認されている。

弥生時代後期も引き続き、北原遺跡で集落が営まれ、台地上の団子塚遺跡や古新田遺跡で集落が確認されている。自然堤防上では、諸井十二所遺跡で大集落が確認されている。

古墳時代前期は、諸井十二所遺跡で引き続き集落が営まれ、青木遺跡や新堀遺跡でも集落が確認されている。これらは拠点集落と考えられており、嚮向型祭祀と呼ばれている土坑祭祀が見つかっている。

古墳時代中期になると、古新田遺跡で豪族居館と考えられている企画性のある建物群が発見されている。内訳は、主屋が正面に建ち、左右前面に脇屋が二棟ずつ伴い、主屋の西側に脇屋が建っていて、全体はコ字状に配置された主館城、主屋と脇屋そして倉庫の三棟で構成された居館城、総柱式の倉庫が四棟、倉庫のほかに高殿、神殿とも考えられている総柱式の建物が二棟、底付きの建物二棟がロ字状に配置された倉庫城、竪穴住居が主体の居住域と建物群を四つに分類されている。

今回報告の1999年に行った4次調査で、その建物群が南にも展開していることがわかった。うち一棟は、四方向に庇(外屋構造)を持つ建物と考えられている。

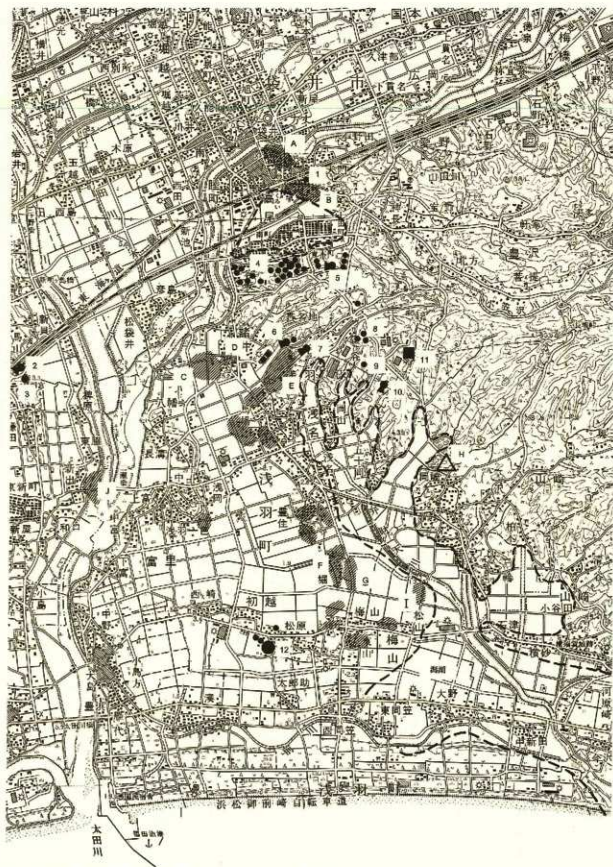


図3 浅羽低地を中心とする主要遺跡 (S=1/50,000)

古新田遺跡の所在する台地の末端から自然堤防にかけて所在する高道遺跡で、集落跡が見つかった。

丘陵上では、古新田遺跡の豪族の墓と有力視されている浅羽五ヶ山古墳群や、銅芯金貼りの耳環・スズ製銅・ガラス小玉・堅櫛など装身具を主体とした遺物が出土した五ヶ山B1号墳が確認され、被葬者は、交易職掌者と考えられている。

五ヶ山B1号墳より丘陵奥に所在する五ヶ山B2号墳は、約33×約28mで2段築成の県内最大の方墳である。埴輪と葺石をもち、主体部からは甲冑・漆塗盾・農工具・刀・剣・槍・鉾・鉄鏃など武器・武器を主体とした副葬品が発見されている。被葬者は、堂山古墳に埋葬された王を軍事的に補佐した將軍であると考えられている。

古墳時代後期、丘陵・台地では貴名地古墳群、団子塚古墳群が確認されている。

貴名地古墳群は北側の尾根をA群、南側の尾根をB群とわけられており、どちらも全長約30m級の前方後円墳を中心として、周りに円墳が築造されている。1997年に貴名地B2号墳の試掘調査が行われ、墳丘規模が32mの前方後円墳であることがわかり、前方部と後円部のくびれ部付近の墳丘裾から墳丘構築途中の儀礼に使ったと考えられる須恵器の短頸壺・甕・高坏が出土している。短頸壺を除く他の須恵器は、衛門坂産の可能性を持っているらしい。

団子塚古墳群は、町内で最も古墳が密集している地区で、浅羽町と袋井市にまたがって数十基分布している。木棺直葬、横穴式木芯粘土室、横穴式石室、小石室などの埋葬施設が確認されている。

以上、古新田遺跡、貴名地B2号墳、高道遺跡と、その周辺遺跡の概要を記した。今後の調査によって、古新田遺跡未発掘部分の建物群の構成、古新田遺跡と周辺の集落遺跡との関連、豪族居館の主の墳墓の特定、貴名地B2号墳と周りの円墳の関係が、少しずつ解明されて行くことを期待したい。

[参考文献・引用文献]

- 加藤芳朗 「第一編第二章第一節 平野の成立と変遷」『浅羽町史 通史編』2000 浅羽町
柴田稔 (編) 『浅羽町史 資料編一 考古・古代・中世』1997 浅羽町
柴田稔 「第二編第三章 古墳時代の浅羽」『浅羽町史 通史編』2000 浅羽町
『北野遺跡・宮前遺跡』2000 浅羽町教育委員会

[浅羽低地を中心とする主要遺跡の一覧] (番号は図3に対応)

- A. 掛之上1遺跡 (袋井市) B. 大門1遺跡 (袋井市) C. 諸井十二所遺跡 D. 楠宮遺跡 E. 古新田遺跡
F. 新堀遺跡 G. 青木遺跡 H. 衛門坂古墳群 I. 北野遺跡 J. 西向遺跡
1. 大門大塚古墳 (袋井市、径26mの円墳、6世紀中頃) 2. 松林山古墳 (磐田市、全長107mの前方後円墳、4世紀後半)
3. 高根山古墳 (磐田市、径58mの円墳、4世紀後半) 4. 団子塚遺跡・古墳群 5. 高尾山古墳群 6. 貴名地A2号墳
(全長約30mの前方後円墳、6世紀) 7. 貴名地B2号墳 (全長約32mの前方後円墳、6世紀前半) 8. 浅羽五ヶ山古墳群
(30～40mの円墳数基で構成、5世紀?) 9. 五ヶ山A1号墳 (径20mの円墳、5世紀後半) 10. 五ヶ山B1号墳
(全長約40mの前方後円墳? 5世紀中葉) 11. 五ヶ山B2号墳 (33×28mの方墳、甲冑・盾・鉄製品、5世紀中葉)
12. 地蔵山古墳 (径40mの円墳、5世紀末～6世紀初頭)



図4 調査区位置図 (S=1/5,000)

- | | | |
|--------------|-----------------|-------------|
| 1 古新田遺跡2次調査 | 2 古新田遺跡3次調査 | 3 古新田遺跡4次調査 |
| 4 サンワ化学駐車場調査 | 5 貫名地B2号墳範囲確認調査 | 6 高道遺跡1次調査 |
| 7 高道遺跡2次調査 | 8 光徳寺跡試掘調査 | |

第2章 調査成果

1 古新田遺跡2次調査

概要(図5) 歩道設置部分のうち、0.45m規模のバックホーのバケットで掘削可能な範囲全域に長大なトレンチを設定し、重機による掘削を実施した結果、勤労者福祉センター(北公民館)の北側と、そこから100mほど東へ行った地点の2ヵ所で遺物包含層が確認された。

そこでこの2ヵ所を発掘調査対象地とし、トレンチの幅を最大限に拡張して遺構の発見に努めた。以下、勤労者福祉センター北側の地点を西区、東へ100mの地点を東区として記述する。

西区の調査 調査区は道路に面して東西方向に25m、東側の幅2m、西側の幅3.5mの台形状を呈し、面積は約70㎡である。

東端の標高は12.1mほどで西に向かって緩く傾斜し、標高11.4mのあたりから谷地形となって傾斜が急となる。つまり調査地点は谷の縁に相当する。このような旧地形は地表面からは認識できず、近代以降の開墾により周辺部が予想以上に平坦に造成されたことを物語っている。

遺構は、全域に小穴が見られるが明確なものではなく、東端で3基の土坑が発見された。このうち1基は楕円形を呈し、縦2.2m、幅1.3m、深さ0.2m前後の規模を持っている。覆土中から古新田1次調査によって出土した滑石製の白玉と同じものが1点出土した。

谷地形の覆土は礫混じりの黒褐色粘質土で、土師器の細かい破片が多く含まれていた。遺物は殆どがここから出土している。

東区の調査 調査区は道路に面して東西方向に長さ22m、幅2mの規模で設定し、竪穴住居跡1軒が発見されたので南北にそれぞれ0.6m分拡張した。面積は約50㎡である。

調査地点の北側は谷地形となっており、この住居跡はその縁に存続したことになる。遺構は竪穴住居1棟、中世の土坑1基である。

竪穴住居(図版2-1) 東西方向の幅10.5mの規模を持つ大型の住居跡で、遺構発見面と床面のレベル差は0.1~0.15mほどである。西側で2時期の壁溝を発見し、外側の溝では北側の谷方向に向かう排水溝が確認できた。内側の溝の方が切り合い関係の確認によって古い時期のものと判断されたが、その方向は東に振れており、構造上の疑問が残る。しかし現状では住居を拡張したものと理解している。

床面からは3基の柱穴と3基の土坑、3基の焼土集中ヵ所がそれぞれ発見された。柱穴1・2共に柱痕跡が残り、床面から底までの深さが0.35mある。遺物は住居跡の東側で数点分が出土した。

墓壇(図5右下、図版2-2) 住居跡の西端から4mの地点で墓壇が1基単独で発見された。遺物は出土しなかったが、遺構の形態と、覆土の状況から、1次調査・貫名地B2号墳調査時に確認された中世墓であると判断した。

縦1.0m、幅0.65m、深さ0.4mの規模を持つ楕円形の墓壇で、西側を除き壁は垂直に立ち上がっている。内側には中央部を空けて、礫が多数入れられていた。このうち、火を受けたものは特に図にドットを入れた。土層は石の無い1層が黄色土混じりの褐色土、石の含まれる2層が褐色土である。

遺物(図6、図版3) 図中1~5が東区の竪穴住居内から出土した土器。1~3は高坏で2は大型のもの。これらは端部にかけてハの字状に大きく開く。4は小形埴、5は須恵器甕である。6~10が西区の谷地形の覆土から出土した土器。6~9が高坏、10が弥生土器。

これらは、1次調査において出土した土器と同様のもので占められている。

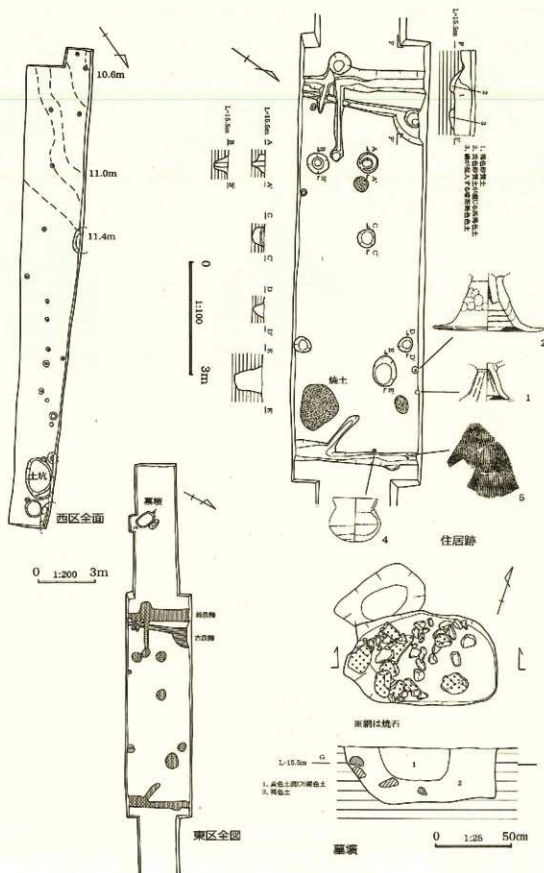


图5 古新田遺跡2次調査区遺構図

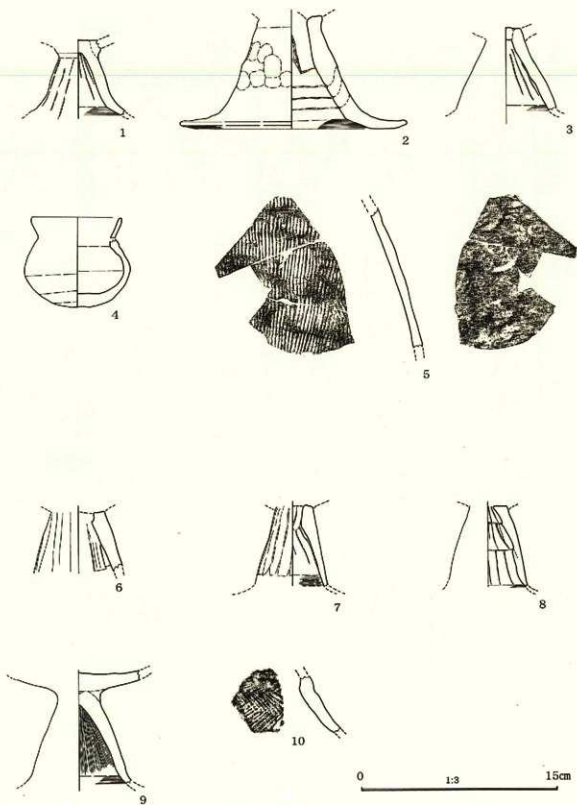


図6 古新田遺跡2次調査出土遺物

2 古新田遺跡3次調査

基本層序は、地表の耕作土から約50～90cm下げたところで黒色有機質土となり、さらに10cm下げた地山に至る。地山の標高は調査区北隅で約13.7m。北から南に向かって僅かに傾斜している。

調査で新たに見つかった主な遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡2棟、土坑1基、数条の溝状遺構、小穴である。

遺物については、極少量の土器が出土している。どれも小破片のため図示できなかった。

今回の住宅の基礎工事では、遺構に影響が及ばないことから、これらの一部掘削、半截に留めて、全体に砂を薄く被せて保護し、その上に土で埋め戻して保存してある。

竪穴住居跡1（図7・8、図版4・5）平面形は南北方向に主軸を持つ隅丸方形で、主軸は座標北に対し13°東にずれる。長軸4.8m、短軸4.4mを測る。覆土は暗オリーブ褐色粘質土で検出面から5cmで床面に至る。柱穴は4基確認されている。径は25～40cmで深さが15～25cmを測る。柱間距離は南北で2.9m、東西2.3～2.4mである。炉跡は住居跡の中央西よりに位置している。

壁溝は住居跡を全周している。幅は約25cm、深さが床面から約10cmである。南側の一部が60～80cmと膨らんでいた。貯蔵穴と思われる。排水溝は東南コーナーから南に向かって延びており、幅は約50cm、長さは3.3mの所で調査区外に至る。

床面から極少量の土器の破片が出土している。時期決定の材料にはならなかったが、住居の平面形から弥生時代後期に属するものであろう。

竪穴住居跡2（図7、図版4・5）溝状遺構が北側に半月状に周っている、壁溝であろう。壁溝より内側で、炉跡が確認できた。主柱となる柱穴は確認できなかったが、恐らく竪穴住居跡であろう。住居跡の中央を西南から東北方向に横切る溝状遺構が見られた。別の竪穴住居跡の排水溝であろう。

掘立柱建物跡1（図7・9、図版4・6・7）主軸の方位は、ほぼ南（N-89°-E）に向いている。南東隅の柱穴は調査区外で確認されていないが、梁間3間（4.7m）、桁行4間（5.2m）の建物である。柱穴の形態は円形で、径は30～45cm、深さが15～35cm、柱痕の規模は12～15cmを測り、柱穴下層から根石が確認されている。柱間距離は梁間で1.5～1.6m、桁行で1.1～1.5mである。主軸の方位が古新田遺跡4次調査で見つかった掘立柱建物群と同じ点が注目される。

掘立柱建物跡2（図7・10、図版4・6・7）調査区の北隅で検出した建物で、梁間2間（2.25m）、桁行は調査区外に伸びているとも考えられるため、2間（3.3m）か、それ以上の規模であろう。この建物の主軸の方位は座標北に対し西へ18°傾いている。

柱穴の形態は楕円形もしくは円形で、径は40～60cm、深さが15～20cm、柱痕の規模は12～14cmで柱穴の下層から根石を確認した。

溝状遺構1（図7）調査区北辺西寄りに位置する。平面形は北端から南に向かう途中から膨らんでいる。南端は溝状遺構1に切られているが、竪穴住居跡1と接するところで終わっている。幅は北側で約90cm、南側で約1.7m、覆土は黒褐色である。北は調査区外へ伸びている。

溝状遺構2（図7）調査区北辺西寄りから、同西辺中央よりにかけて、逆L字状に溝が通っている。すべての遺構を切っていた。覆土は灰色土で、北隅と西隅で華大の礫が充填されていた。

土坑1（図7）住居1の排水溝を切って所在する。少しいびつな楕円形で、長さ約1.5m、幅約60cm、深さ約30cmを測る。覆土は黒褐色土、褐色粘質土で、土器片が出土している。

土坑2（図7）調査区北辺西寄りに位置する。溝状遺構1を切り、溝状遺構2に切られている。平面形は分からない。深さは20cmで、覆土は灰色土、中から骨片が出土した。

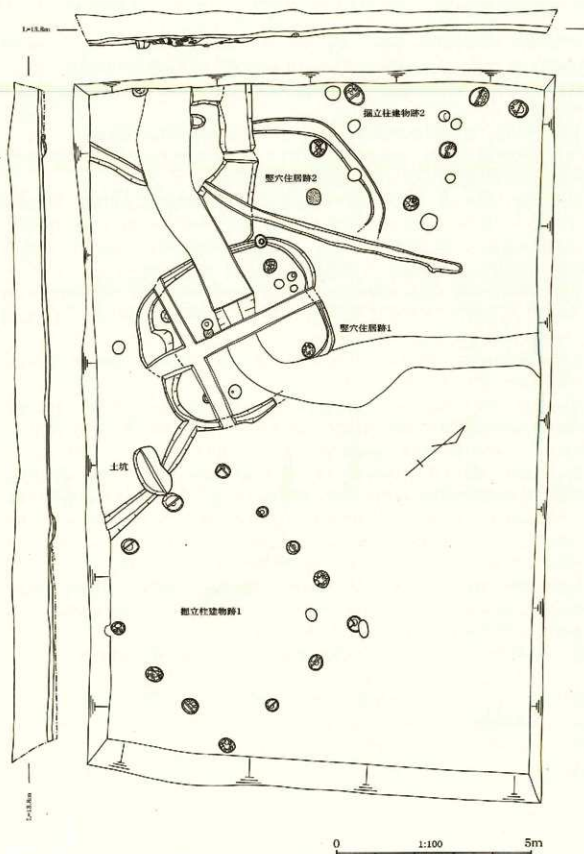


図7 古新田遺跡3次調査区遺構全体図

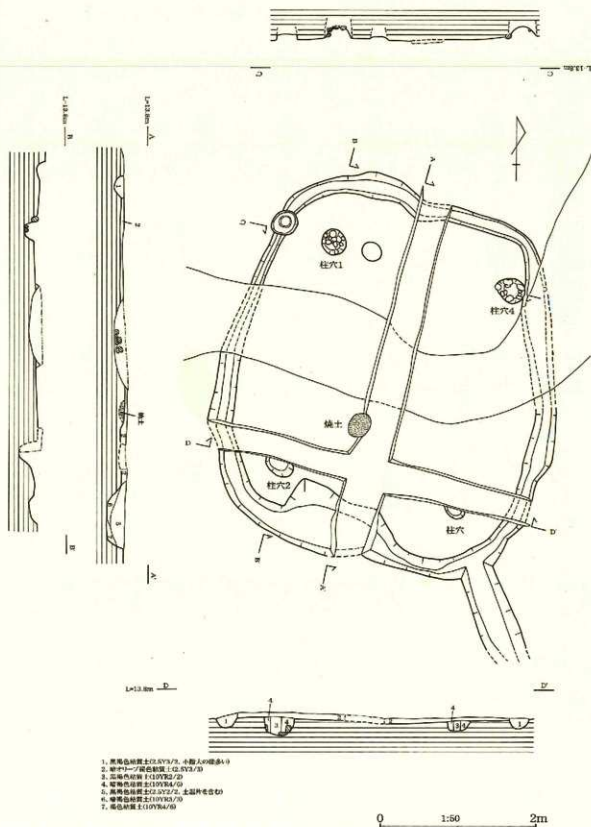


図8 竪穴住居跡1実測図

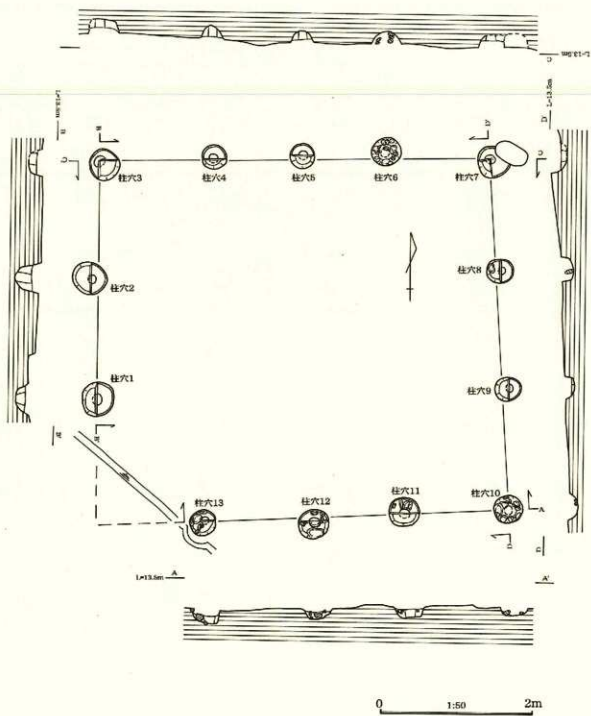


图9 掘立柱建物跡1実測図

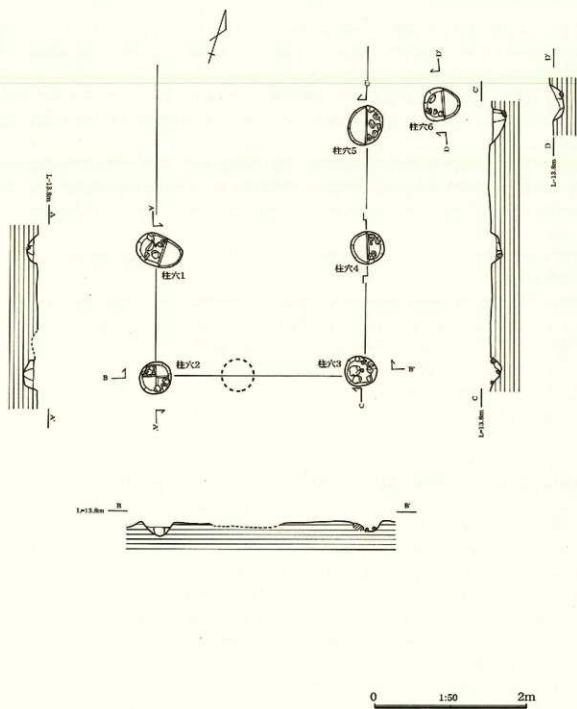


图10 掘立柱建物跡2実測図

3 古新田遺跡4次調査

概要 調査は最初住宅の建物部分をさけ、周囲を囲むようにトレンチを設定した。トレンチからは中央部から谷を人工的に埋めて整地した部分と、2ヵ所の掘立柱集中ヵ所を発見し、古新田遺跡の主要建物が存在すること確認し埋め戻して修了した。

しかし、住宅が地盤の悪い谷部分にちょうど位置することがわかり、ボーリング調査を行った結果、地盤改良を必要とし、この部分の遺構が破壊されることになったので急遽、その範囲を発掘調査することになった。

試掘確認調査・本調査の結果確認できた遺構は、谷を埋めた整地土、その中に設けられた暗渠排水が一条、四方向に庇を持ち、東西方向に主軸を持つ掘立柱建物1棟、これと組み合わせ棟持柱を持ち、南北方向に主軸を持つ掘立柱建物1棟の計2棟分の建物、複数の土師器が被さって埋納された祭祀土坑一基、小穴である。

基本層序は、耕作土(50~80cm、これは茶畑造成に伴う盛土)、オリーブ灰色粘質土(10~20cm)、そして地山に至る。

遺物は全て土器で、谷を埋めた整地土上面の包含層からの出土が最も多く、他に掘立柱覆土の上面、及び掘り方内から数点、祭祀土坑に埋納された土師器である。その内容は須恵器の甕、壺、罍、蓋杯、土師器の甕、壺、高坏、小型埴、甕?でコンテナに約2箱分の量がある。

整地土(図11・12・13、図版8・9上) 調査区中央を東西方向に谷地形があり、これを埋め立てて整地している。谷の規模は東側トレンチで幅12.5m、深さ80cm、西側トレンチで幅10m以上、深さ1.3mである。

整地の状況は、調査地の中央に十字にトレンチを設け確認した(図15)。断面の観察によると、谷の両側から地山に近い褐色系粘質土でもって一気に埋めている。

遺物は暗褐色粘質土、及び黒色粘質土中(整地土内上面の土層)から土師器片が出土している。

暗渠排水(図11・13・14、図版13上) 住宅予定部分の南側で確認された。整地の途中、谷の深い部分の埋め立てが終了した段階で、掘立柱建物1に並行するように溝を掘り込んでいる。

調査では5m分を確認し、幅は50~65cm、深さは東側断面で60cmである。掘立柱建物1の西北隅柱の辺りから一段深く掘られ、その中に親指~拳大の礫を多量に入れている。

祭祀土坑(図11・13、図版13下) 住宅予定部分の北西壁に接する場所に位置し、土師器が複数被さって埋納された祭祀土坑である。土坑は北西壁の断面観察で黒色粘質土の下面から掘り込んでいることが確認できた。これは、谷の深い部分の埋め立てが終了した段階で土坑が掘られたことを示しており、暗渠排水の設置と同時に祭祀が行われた可能性が考えられる。

土坑の中では、まず甕の破片を底に敷き、胴部下半を倒った甕を上下逆さに置き、その内側に壺を入れ、その壺と甕の隙間に甕片、高坏などの破片を巻くように詰めて入れていた。この出土状態は、祭祀で使用した器の封印という行為を示しているように考えられる。

土器の年代であるが、外側に用いられた壺が5c後半で、内側の壺が6c後半と大きな年代差が有り、伝製品を使用しての祭祀が行われた事例と考えざるをえない。

掘立柱建物跡1(図11・15、図版9下・11) 調査区の南東隅で検出した。トレンチ調査の段階で発見し、その後の本調査で西北隅を確認した。調査範囲に制約があったので、全体像は今後の課題となるが、これまでのデータから推測できる状況を報告しておく。

この建物は、その主軸をほぼ東西方向に持ち、2間(約4.5m)×4間(約6.9m)と想定した身舎の周り四方向に庇を伴う建物と考えられる。屋根構造は入母屋造りである。

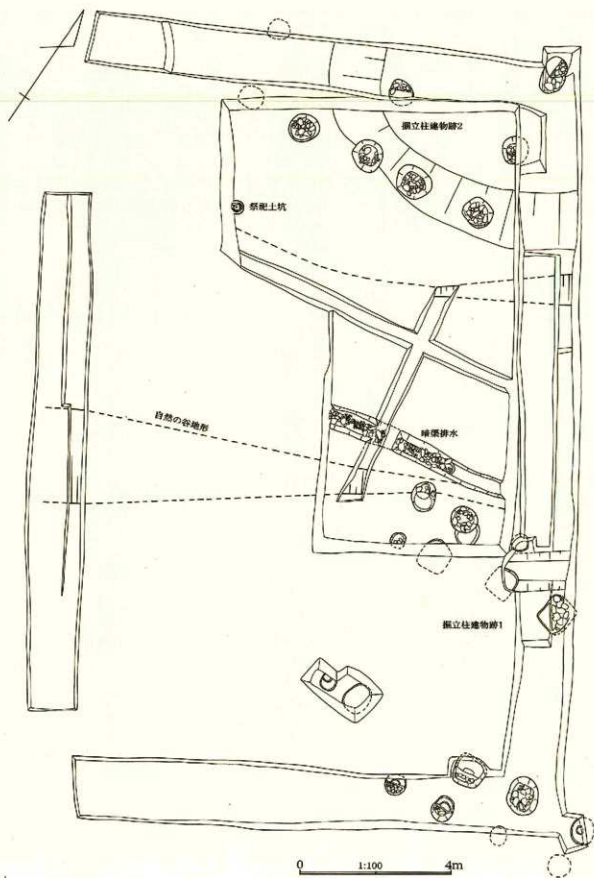


図11 古新田遺跡4次調査区遺構全体図

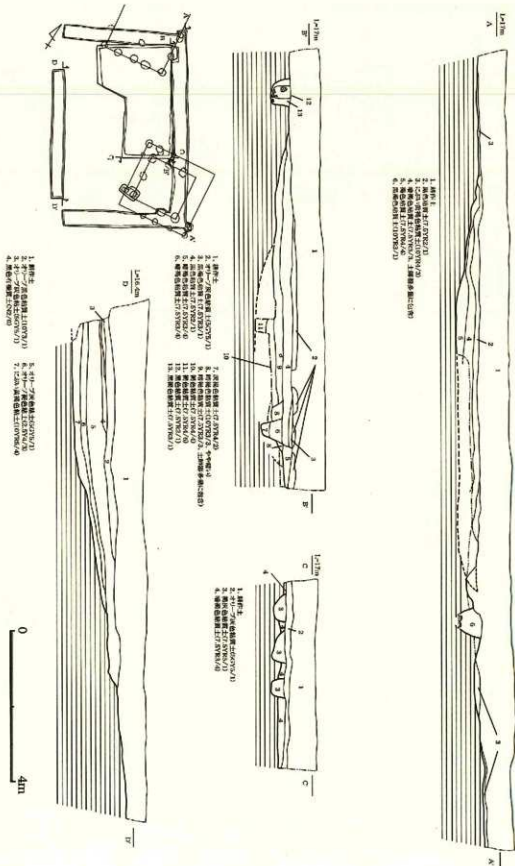


图12 土层断面图集成

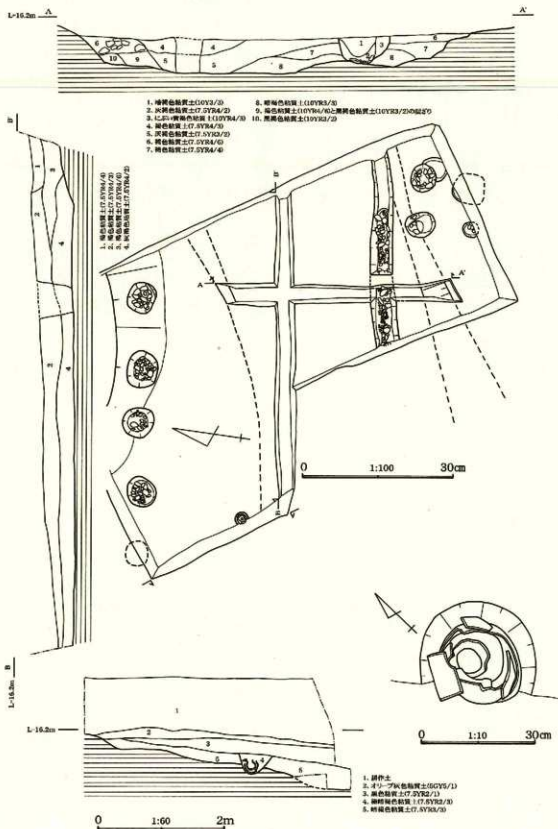


図13 遺構実測図

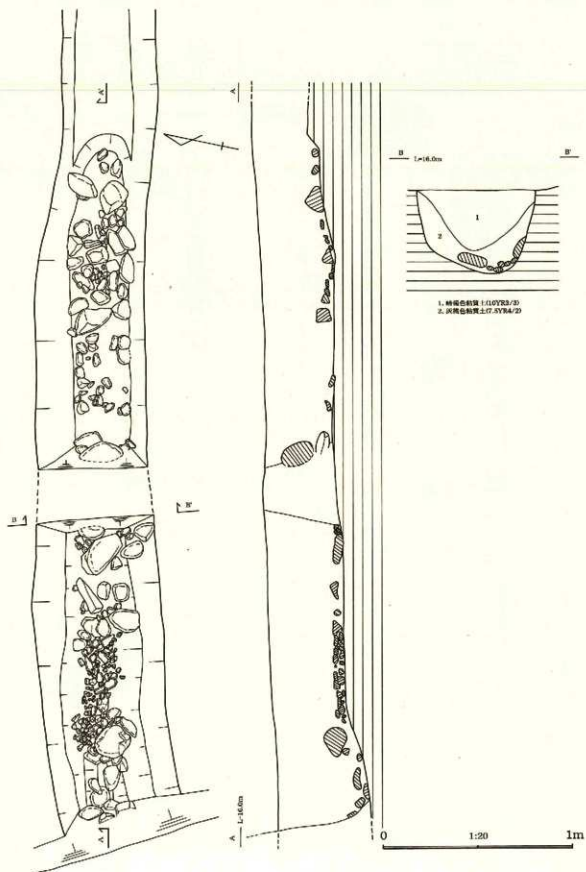


图14 暗渠排水实测图

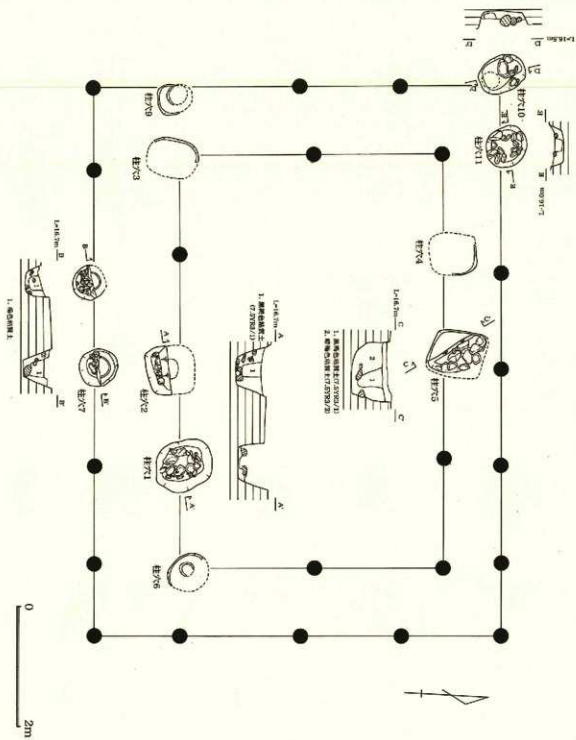
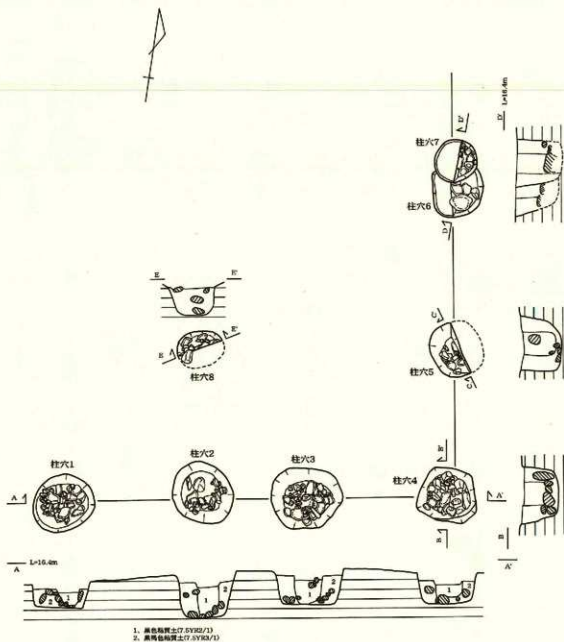


图15 掘立柱建物跡1実測図



0 1:50 2m

图16 掘立柱建物跡2実測図

身舎部分の柱穴の平面形は隅丸方形もしくは楕円形で、その規模は70~90cm、深さは50~65cmである。断面は逆台形を呈し、壁面は直線的に立ち上がっている。柱掘り方内を掘り下げた柱穴全てから拳大の基礎石や根巻石が多量に見られた(柱穴3・4・6・9はプランの確認のみ、柱穴2・5・7・8は半載のみ)。

底部分の柱穴は、平面形が円形で径約50~60cm、深さは25~50cmである。断面は逆台形で、垂直気味に立ち上がる。身舎部分の柱穴に比較すると、一回り規模が小さい。やはり柱掘り方内を掘り下げた柱穴全てから根石が確認された。柱穴のうち、4・5・10・11は整地土上面から掘り込まれる。

掘立柱建物2(図11・16、図版9下・10・11・12) 調査区の北隅で検出した建物で、建物内に棟持柱(柱穴8)を持つ構造と考えている。梁方向に4間分(約6.8m)確認し、桁方向は調査区の北に伸びている。南辺の柱穴は整地土上面から掘り込まれる。

柱穴の平面形は円形で、規模は70~90cm、深さは35~60cm、柱痕径は28~35cmである。壁面は垂直気味に立ち上がり、断面逆台形を呈する。掘立柱建物同様、柱穴内から多量の拳大の根石が確認された。根巻石や基礎石として使われていたものであろう。

柱間距離は見つかっている範囲で、東西方向が1.35m~1.9m南北方向が2~2.05mである。

遺物(図17・18、図版14・15) 1~5は土師器が被さって埋納された祭祀土坑から出土した。

1は壺の内側に入れてあった壺で、器高18.6cm、口径11.4cm、胴径15.7cmである。口縁部は垂直方向にやや外反ぎみに立ち上がる。胴部は球形で底部は丸底。外面は口縁部から胴部下半にかけて縦方向にハケメ調整が施され、のち口縁部に横ナデを行っている。内面は口縁部を横ハケのち横ナデ調整、体部はケズリのちナデ調整を行っている。坂尻1-3(TK43平行)に該当する。

2は壺の外側に逆さにして被さっていた甕で、器高22cm、口径16.8cm、胴径22.6cm、底径5cmである。口縁部はくの字状に屈曲し、外反しながら立ち上がる。体部は球形胴で、底部に粘土紐を貼り付けて高台にしている。外面は口縁部を横ナデ調整、体部上半は斜め方向にハケメ調整が施されている。内面は口縁部に横ナデ調整、体部にナデ調整が行われている。5c後半のものである。

3は壺と甕の隙間に詰め込まれていた別個体の甕の胴部破片である。胴径は推定で23.6cmを測る。

4・5も壺と甕の隙間に詰め込まれていた高坏の口縁部破片である。4は口径20cmで口縁部は若干外反しながら立ち上がる。内外面とも横ナデ調整。5は口径17.6cm、緩やかに外反しながら立ち上がる。あと図示はしていないが、甕?の破片を図版15上に載せた。

6~9は整地土上層から出土した高坏の脚部である。どれも脚部下位で外に屈曲しているようである。

7・8は内側にシボリ痕がみられた。

10は小型埴で、口縁部は欠損し胴部は算盤状を呈する。整地土上層から出土した。

11は甕もしくは壺の底部と思われる。底径5cmを測る。整地土上層から出土した。

12・13は杯蓋の破片で、整地土上面から出土した。14・15は坏身の破片で14が耕作土、15が耕作土直下の灰色粘質土から出土している。

16は坏身の破片で、整地土上層から出土する。底部に回転ヘラケズリが施されている。

17は湖西産の藤の口縁部の破片である。掘立柱建物2の柱穴4、根石と根石の隙間から出土した。口縁部は開き、口縁部と頸部の境に一条の沈線を巡らす。Ⅲ期中葉(TK43平行)に該当する。

18は壺の胴部下半の破片である。底部に回転ヘラケズリが施されている。

19は甕の肩部の破片である。外面は平行叩きのち力キ目を施す。内面は同心円叩き痕がのこる。

20は甕の体部の破片である。掘立柱建物2、柱穴5付近から出土している。外面は叩きを施し、内面は擦り消されている

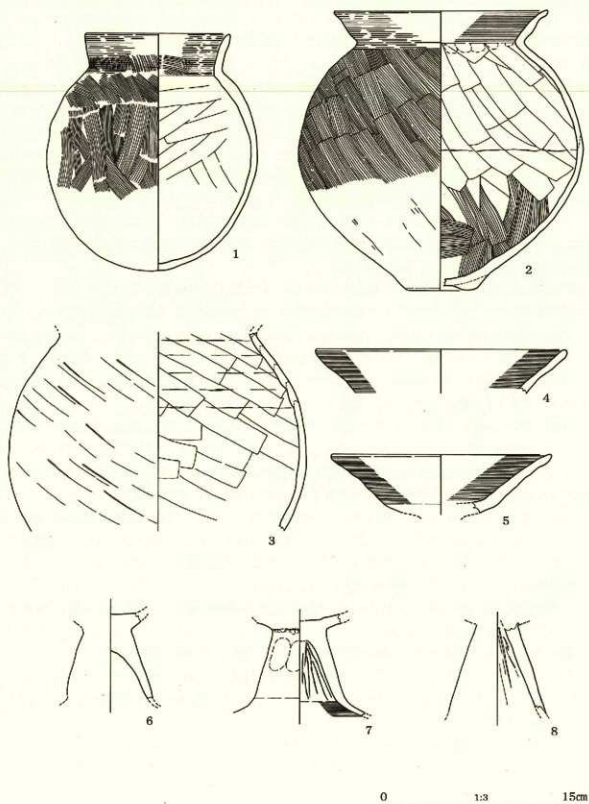


図17 古新田遺跡4次調査出土遺物1

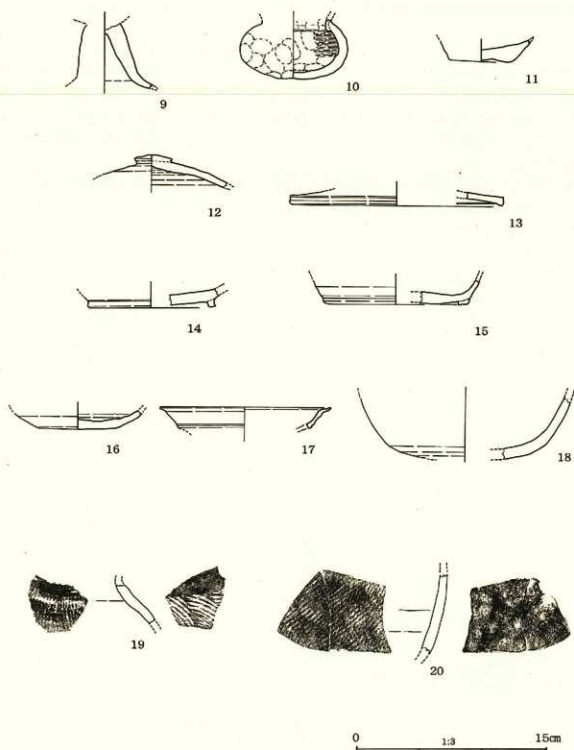


圖18 古新田遺跡4次調査出土遺物2

4 貫名地B2号墳範囲確認調査

概要 貫名地B2号墳の墳丘は、攪乱と土取りによって旧状が失われ、現在では前方部がかなり短い前方後円墳にみえる状況であった。このため、少しでも多くのトレンチを墳丘裾に設定し、墳丘の復元を試みることとなった。

調査は最初に拡幅する歩道部分から手を付け始めた。図19に示した「墳丘断面位置」というのがこれにあたる。この断面で後円部裾の周溝を確認し、1～7トレンチでそれぞれの部分における墳裾と、周溝の確認を行った。

調査の結果、B2号墳は前方部と後円部の幅がほぼ等しい前方後円墳になることが確認できた。では、それぞれの箇所の調査成果について順を追ってみてみよう。

墳丘断面（図21、図版17・18） 歩道拡幅で削平を受ける墳丘の範囲は、長さ19m分であった。この部分の墳丘は、表土に近い上面部分と墳丘断面ー2・3に示した東寄り半分程が、茶畑の耕作や遺物の獲得を目的とした掘削によって攪乱を受けていた。

しかし、残りの部分では特徴的な墳丘の構築状況を伺わせる土層断面が観察できた。旧表土は黄灰色粘質土であるが、盛土が積み上げられる範囲で全面にわたり10～15cm程の幅で茶色に変色し、僅かに炭が混じっていた。これは、墳丘構築前の焼き払い（野焼き）が行われた痕跡ではないかと推定している。

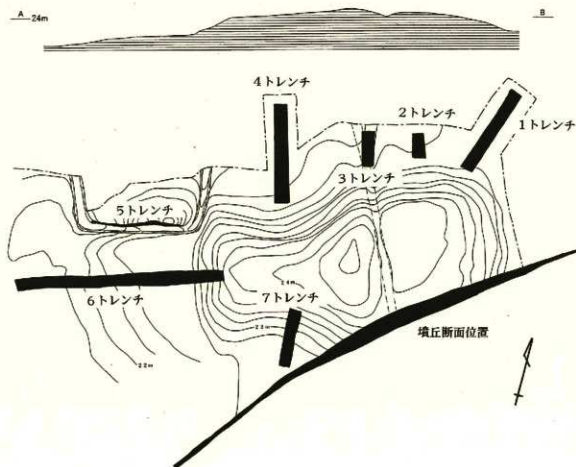


図19 貫名地B2号墳トレンチ位置図

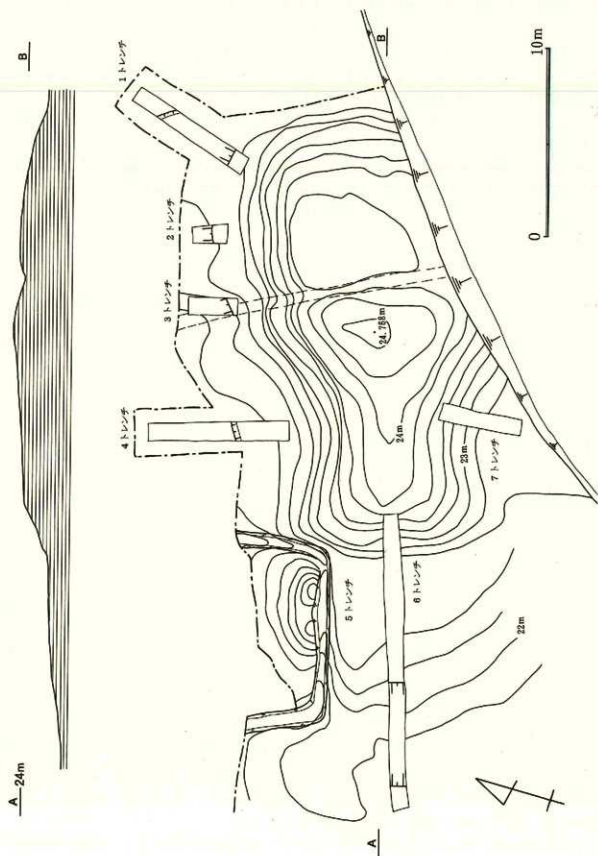


図20 黄名地B2号墳実測図

墳丘盛土は大まかにみると、粘土(灰色粘土・褐色粘土・黄褐色粘土)と黄色粘質土を交互に積み上げながら構築されている。これを更に細かく観察すると、墳丘断面―1の端1.6mの辺りから4mにかけての範囲では、特に灰色粘土と黄色粘質土を交互にして台形状に積み上げており(図21の破線部分、図版18-1)、それを境に東側では黄色粘質土を主体とし、西側では炭が多く混じる黄褐色粘土を主体とした盛土を行っており、作業工程の違いを指摘することができる。

さて、これはどのように理解することができるだろうか。台形状に積み上げられた盛土は後円部の中心近くにあり、主体部に関するものとするれば、墓壇のまわりに築かれた土手と考えることもできる。そうすると、この断面にみる状況は横穴式木室墳の主体部とその外側に行われた盛土というように理解することもでき、横穴式木室墳の前方後円墳における類別として浜松市の瓦屋西C5号墳をあげることができる。いづれにしても、一方向の断面からの観察にすぎないので、今回は可能性を指摘するだけにとどめた。

この断面調査で周溝を確認した(図版18-2)。墳丘断面―3に示したのがそれで、東側が攪乱を受けており旧状が確認できないが、ここでは幅3.1m以上、深さ0.5m分を確認した。

1 トレンチ(図22、図版20-2) 後円部の東北方向の隅に、墳丘裾と周溝の確認を目的として設定した。

トレンチは幅1m、長さ6.5mの規模である。この部分は全体に攪乱が深く及んでいたが、かろうじて後円部の裾と、周溝外側の肩を確認した。ここでの周溝の幅は4.0mである。周溝内の覆土はオリープ黒色粘質土で墳丘盛土の流れ込みと考えられる。

2 トレンチ 後円部北側裾の確認を目的として設定した。トレンチは幅1m、長さ2mの規模である。調査の結果、後円部の最も膨らむ部分の墳丘裾を確認した。

3 トレンチ 2 トレンチ同様、後円部の北側裾の確認を目的として設定した。トレンチは幅1m、長さ2.5mの規模である。調査の結果、墳丘裾を確認した。

4 トレンチ(図23、図版19) 墳丘北側、くびれ部の確認を目的として設定した。トレンチは幅1m、長さ7.5mの規模である。調査の結果、周溝外側の肩と墳丘の裾を確認した。ここでは墳丘構築途中の儀礼に伴うと判断される土器が出土したことが特筆される。

後の時代の遺構として、中世の火葬遺構、集石墓がそれぞれ一基確認された。恐らく両者は一対の関係にあるのではないだろうか。火葬遺構は保存のため半截するだけにとどめたが、壁面が焼土と化し内部に火葬骨の細片が散乱していた。規模は1.05m×0.8m、深さ0.15mで、形状は隅丸方形を呈しており遺物は伴っていない。

5 トレンチ(図22、図版20-1) 墳丘の北西側に小さな高まりが残っていたので、墳丘との関係を確認するために、排水溝を利用して設定したトレンチである。長さ7.5mの範囲を調査した。

地表面から1mほどの高さで残っていた高まりの上半分は木の根による攪乱が及んでいたが、下半分は「墳丘断面」同様の土層が確認できた。旧表土は盛土が積み上げられる範囲では墳丘構築前の焼き払いの痕跡と考えられる10~15cm幅の茶色に変色した部分が認められ、僅かに炭が混じていた。

その上には灰色粘土を主体とした土と黄色粘質土を交互に積み上げ、間に炭が多く混じる黄褐色粘土の層を一層分交えていた。これらは明らかに墳丘盛土の一部であり、このトレンチの調査によって、前方部の半分程が完全に削平されていたことが明確になった。

トレンチの西側、墳丘盛土が途切れるところでちょうど地山面が深く掘削され、周溝となる状況が確認された。

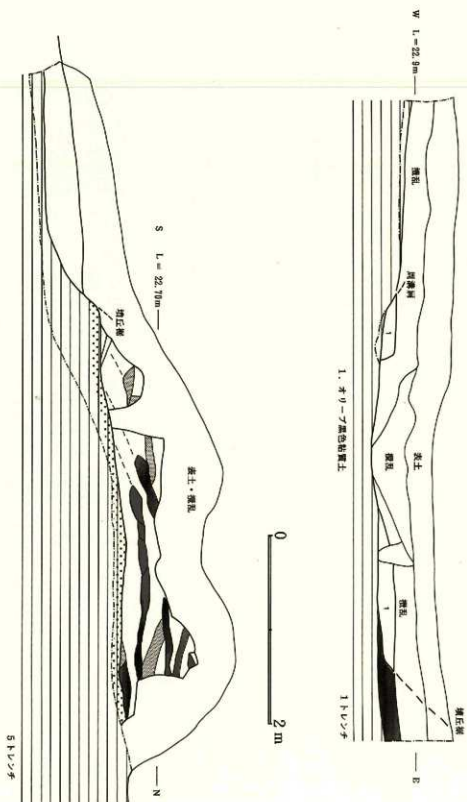


図22 1・5トレンチ断面図

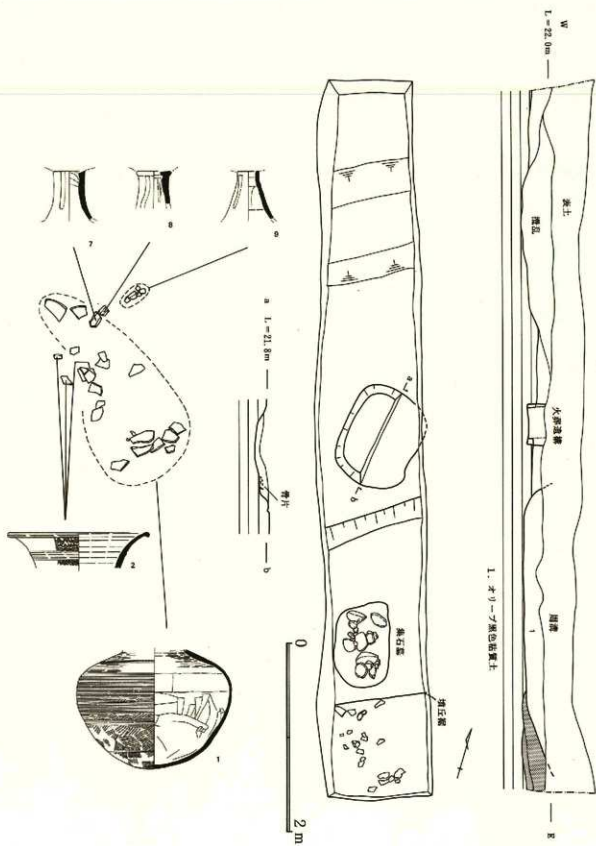


図23 4 トレンチ実測図

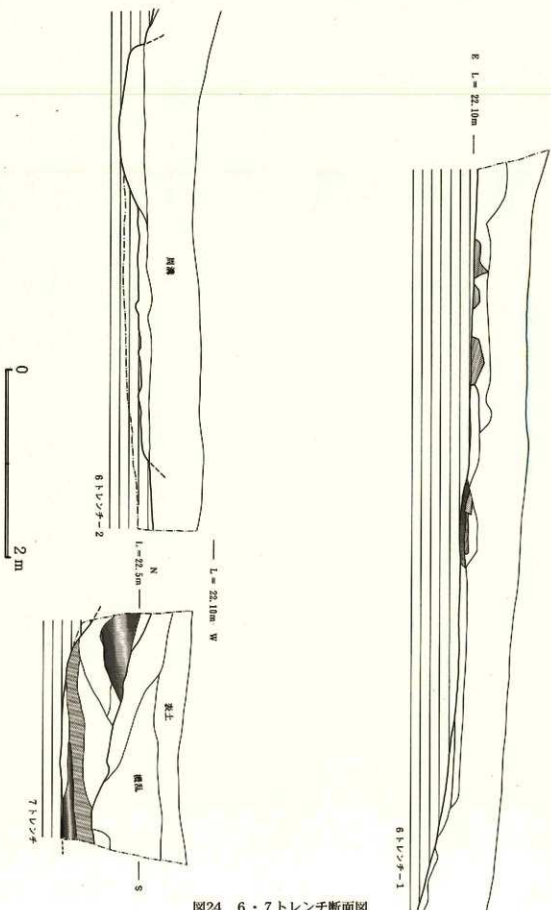


図24 6・7トレンチ断面図

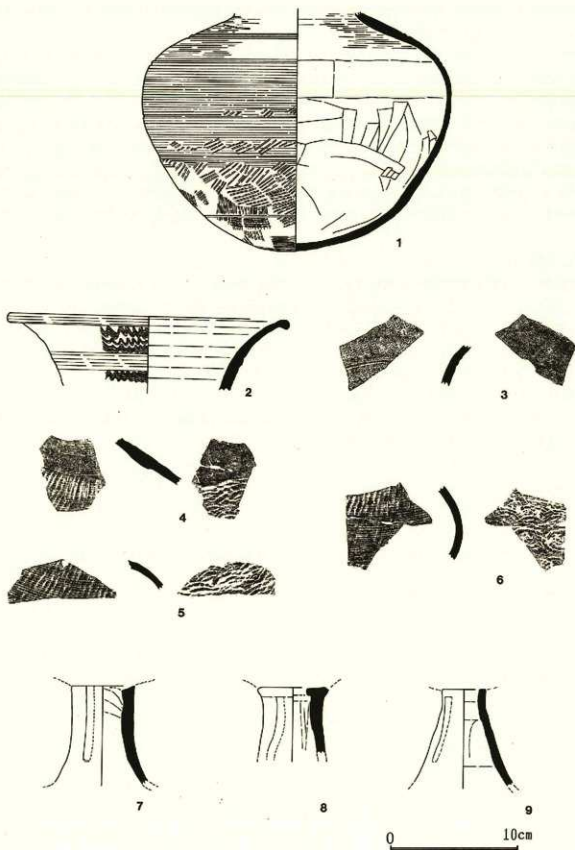


图25 出土遺物実測図

6 トレンチ (図24) 墳丘の西側、前方部の裾と周溝の確認を目的として設定した。このトレンチは墳丘の主軸に並行するもので、幅1m、長さ13.5mの規模である。

墳丘盛土は完全に削平され、地中にも攪乱が及んでいたため、その痕跡はトレンチ東側の地山に近い部分に残っていただけである。しかし、西側で周溝の底部を確認することができた。ここでの周溝幅は5.5mである。

7 トレンチ (図24) 墳丘の南側、前方部と後円部のくびれ部の確認を目的として設定した。トレンチの南側は断面調査の時点で攪乱を受けている状況が観察されたため、これがどの程度まで墳丘に及んでいるのかを見極める目的もあった。

トレンチの規模は幅1m、長さ4mである。図24の断面図は攪乱の及んでいない2.7m分を示した。この部分は墳丘裾より内側にあたるが、これより南側は攪乱も深く墳丘裾、及び周溝の痕跡は残っていない。

出土遺物 (図25、図版21)

黄名地B2号墳に関する出土遺物は4 トレンチの墳丘盛土内から全て出土している。出土したのは金点が須臾器で、小破片のため図示できなかった高杯の脚部1点を含む7個体分が出土した。

1 は短頸壺で胴径24.4cmを測る。頸部は無いがそれ以下の破片は完全に揃い、全体の半分以上まで復元できた。5ヵ所7条の平行沈線によって6分割され、その間を肩部は横ナデ、体部上半から中位にかけては平行叩きの後、カキ目調整が加えられ、底部にかけては叩きを加えている。

焼成は良好で、色調は表面が灰色、断面は赤褐色を呈する。TK208型式段階のものである。

2・3 は甕の口縁部で2条の平行沈線によって2分割され、その間に波状文を施している。口縁端部が丸く膨らむのが特徴である。色調は灰白色を呈する。

4～6 は同一個体で表面は叩きの後、カキ目調整を施す。内面は同心円叩きが残る。色調は灰青色を呈する。

7～9 は高杯の脚部で3方向に透かしを施した短脚タイプのもの。破片のため図は推定復元した。焼きは甘く色調は茶褐色を呈する。

1を除く土器はTK10型式段階の所産と考えられ、衛門坂窯産の可能性を持っている。

5 ま と め

最後にトレンチ調査の成果を総括してまとめとする。

規模 7ヵ所に設けたトレンチと断面調査により墳丘は全長32.5m、後円部の径18m、前方部の幅18mの規模であることが判明した。土取りが行われているので、高さについては推定するしかない。ちなみに現状での後円部の高さ1.9m、前方部の高さ1.5mである。

外部施設 墳丘南側の攪乱が著しいため確認できなかったが、回りに周溝を巡らしたものと推定される。

但し、墳丘に沿った形態ではなく、かなり変形したものではなかっただろうか。墳丘主軸での幅は後円部側が1.5～2m、前方部側が5m前後であった。

主体部 直接トレンチを設定していないが、墳丘断面で記したように横穴式木室の可能性が指摘できる。

年代 遺物番号1の短頸壺を除く他の土器はこれより新しい年代を示しており、しかも儀礼に伴い一括使用されたものと理解される。従って、短頸壺を伝世品と考えると古墳の年代はTK10型式段階以降、6世紀前半という年代を与えるのが妥当なところではないだろうか。

本文を作成するにあたり、鈴木敏則氏に遺物及び墳丘の検討をお願いした。文末であるが明記し感謝申し上げたい。

〔参考文献〕

辰巳均『有玉西区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 上巻』1991年（財）浜松市文化協会

鈴木一有『宇藤坂古墳群』1998年（財）浜松市文化協会

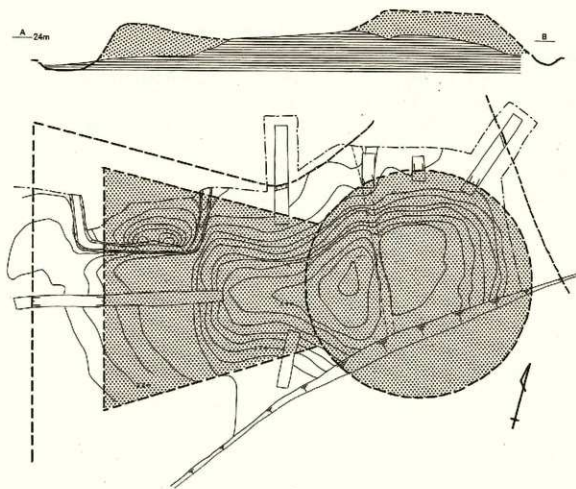


図26 墳丘復元図

5 高道遺跡1次調査

概要 (図27, 図版22, 図版23下) 遺構の検出と一部の遺構掘削と半截に留めて、埋め戻している。基本層序は耕作土(20~35cm)、遺物包含層の黒褐色粘質土(10~25cm)、地山の黄褐色粘質土の順である。

調査で遺構と遺物が確認され、土坑2基以上、溝状遺構4条以上、柱穴、小穴が見つかった。

遺物は主に包含層からの出土で、弥生~鎌倉時代の土器片が出土している。

土坑1は片辺の丸みが大きい隅丸長方形の土坑である。長軸1.16m、短軸73cm、深さが15cm、断面は2段掘りである。台付甕と高坏が割られた状態で出土している。台付甕の脚部は土坑の底で裏返しになっている状態で確認された。

土坑2は隅丸方形の土坑で、長軸1.16m、短軸73cm、深さは5cmを測る。底の北よりで焼土が確認された。

柱穴1は平面が楕円形、覆土は掘方が黒褐色粘質土、柱痕が黒色粘質土である。長軸56cm、短軸45cm、深さは15cm、柱痕径は26cmを測る。

柱穴2も平面形も覆土もおなじで、長軸56cm、短軸45cm、深さは27cm柱痕径は34cmを測る。

遺物 (図29, 図版23下) 1は台付甕の脚部である。底径9.2cm、外面は縦ハケが施され、内面は横ハケが施されており、土坑1の底から出土している。同じ土坑から高坏が出土しているが小破片のため図示できなかった。

2は高坏の脚部と思われる。底径7.5cmを測る。包含層より出土している。

3は身で外面にヘラケズリが施される。包含層より出土している。

4は湖西産の山茶碗の底部である。高台端部に粉殻痕が見られた。攪乱土から出土している。

5は渥美産と思われる、甕の底部の破片である。底径13.4cmを測る。包含層より出土している。

6 光徳寺跡試掘調査

概要 (図29, 30, 図版23) 調査地は浅羽町柴に所在する曹洞宗万古山円明寺の末寺で、弘治元年(1555)に開かれ、大正頃まで存在した宝光山光徳寺の旧境内地である。

基本層序は、耕作土(40~70cm)、遺構面の地山(黄褐色粘質土)である。

11Tで地山が南方向に傾斜しており、12Tに関しては、1m以上にわたって盛土が行われていた。

13,14,15Tは地表下40~50cmで地山となる。

調査地は諸井台地の末端に位置し西に向かって緩やかに傾斜している。これらのことから11Tと13,14,15Tの間から下る西方向の小さな谷を想定している。

確認された遺構は、溝状遺構や土坑、小穴などである。そのうち幾つかは寺跡に関連する遺構と思われる。遺物は殆ど近世のもので、3Tの溝状遺構になるとと思われる底から、小壺の胴部が出土している。

全体に摩滅が激しく調整は分からないが弥生時代のものと思われる。

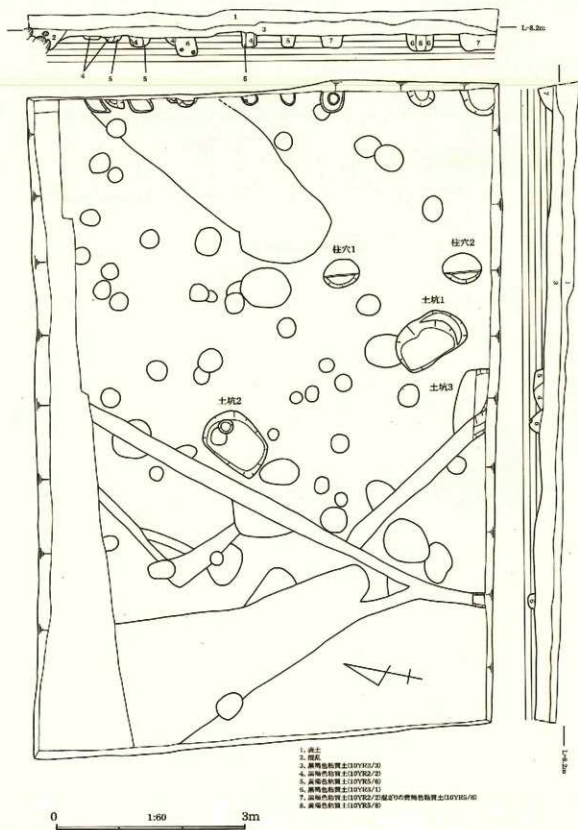


图27 高道遗址第1次调查遗构全体图

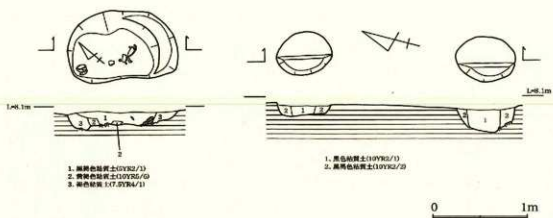


图28 土坑、柱穴实测图

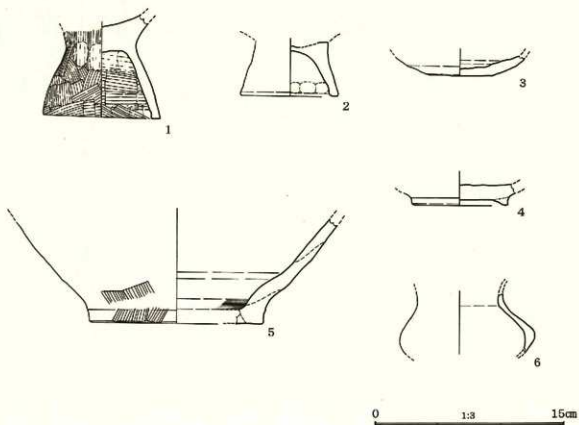


图29 高道遗跡、光德寺跡出土遺物



図30 光徳寺跡試掘調査トレンチ位置図

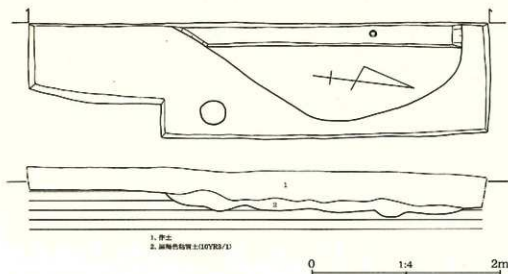


図31 3トレンチ位置図

第3章 総括

これまで各調査の内容を個別に紹介してきた。古新田遺跡の1次調査以降、今日までの間に小規模ながらも調査を継続した結果、当報告書の内容となった。

掲載した調査成果の中では2次調査が最も古く12年前に遡るが、遺跡の地に建てられた浅羽東小学校開校以後、少しずつ周辺の茶畑や畑が住宅に変わり、今後加速度的に遺跡が消滅していくことが危惧される。以下、調査結果に基づき、気が付いた点を整理する。

1990年に実施した古新田遺跡2次調査によって、1次調査で発見された5世紀後半を中心とする遺構群が同じ尾根筋の西側まで広範囲にわたって広がることが確認でき、その中には幅10mの規模を持つ竪穴住居跡も含まれていた。

これを受けた形で実施した1997年の3次調査では、弥生時代後期と考えられる竪穴住居跡と古墳時代と考えられる掘立柱建物跡が見つかり、ほぼ1次調査地点と同じような時代の遺構が全域に広がることが確認できた。

ところが、1999年に実施した4次調査で状況は大きく変わる。ここからは、小さな谷を埋め立てて整地し、その途中で暗渠排水を設け祭祀を行い、土地を確保するという念の込んだ作業を行った状況が明らかとなった。

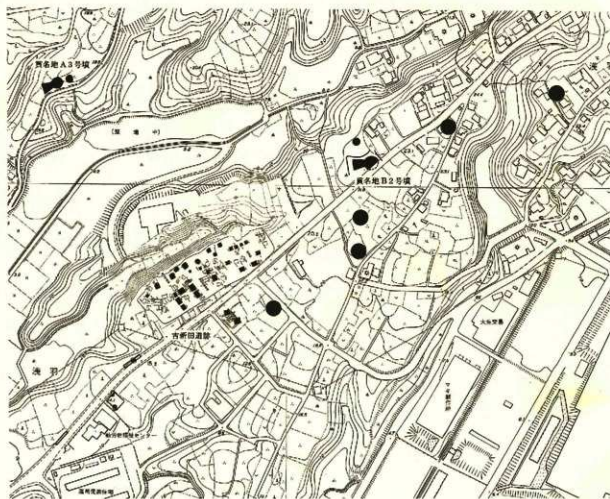


図32 古新田遺跡とその周辺

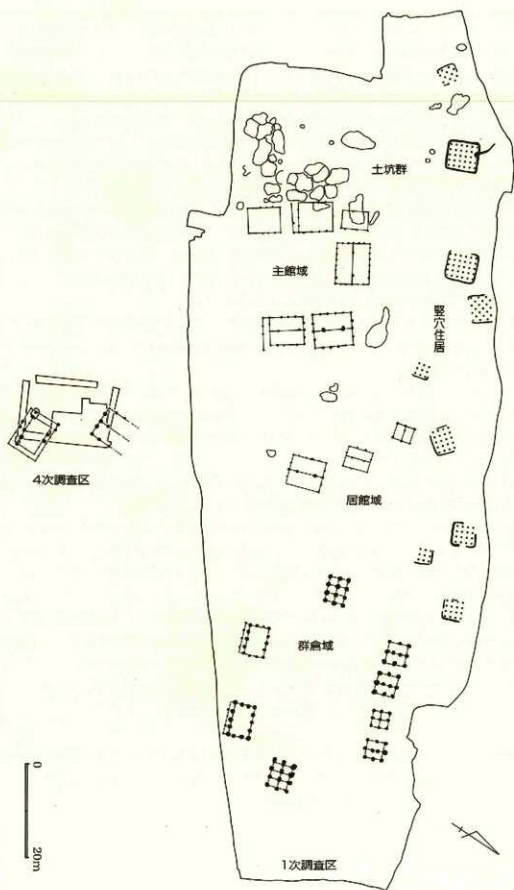


図33 古新田遺跡の建物群と土坑

整地の後、2棟の掘立柱建物が建てられる。このうち1棟は四面に底を持ち、屋根構造は入母屋造りであること、建物の主軸はほぼ東西方向であること、身舎部分の柱掘り方は60～90cm規模と、1次調査で見つかった群倉域の建物に匹敵すること、柱掘り方の中全てに拳大～人頭大の礫が基礎石として、あるいは柱の周りを巻く根巻石として詰められている状況が明らかとなった。

もう1棟の建物はその主軸をほぼ南北方向に持ち、2棟は組み合わせ構造になる。やはりこちらも70～90cm規模の大型の柱掘り方を持ち、内部に基礎石や根巻石が丁寧に詰められている。

2棟の建物は、整地土の上面から掘り込まれており、整地と建物建設が一連のものであると判断された。四面底の建物(掘立柱建物1)を主殿とすると、これと組み合わせる建物は脇殿(掘立柱建物2)になり、左右対象の配置を持つならば東側にもう1棟存在する可能性も検討しなければならない。

ここで問題になるのが、整地の年代と建物の年代である。これを探る鍵は、整地の途中で行われた祭祀に使用されたと考えられる土師器と掘立柱建物2の柱穴4から出土した跡の年代である。

基礎石の隙間から出土した跡は、湖西産のTK43並行と考えられ、祭祀に用いられた土師器は、5世紀後半と6世紀中頃～後半のものが同時に用いられている。複数の土器が複雑に組合わさって出土したが、一番中に使用された壺のみが著しい年代のずれを示している。

しかし、柱掘り方内から出土した跡の年代とは矛盾せず、整地と建物建設が一連の工程の中で実施されたとすれば、6世紀中頃～後半にかけて、従来の古新田遺跡の区画とは異なる、南の一角で、新たな建物群が出現したことになる。

図33は1次調査の5世紀後半を中心とする建物群、土坑群と4次調査で新たに見つかった2棟の建物の関係を示したものである。全体を通してみると、4次調査の建物群は1次調査で見つかった群倉域の建物に柱掘り方の規模や基礎石を詰める点で類似し、建物の主軸も近いものが見られる。また、4次調査地点では後世に建物建設が行われた跡が発見されていない点が1次調査区域の状況とは異なる。

今後、周辺部の調査を続け、古新田遺跡の変遷を明らかにしなければならないが、6世紀以降、古新田遺跡に大きな動きが生じたことは事実のようである。

3次調査で発見された掘立柱建物1は東西方向に主軸を持ち、4次調査の建物群と方向を同じくする。更に、2002年2月から3月にかけて実施した5次調査では、4次調査の建物群と同じ方向に主軸を持つ古墳時代と推定される掘立柱建物跡が1棟発見され、これは4次調査の掘立柱建物1から東北方向に約70mの地点である。

これらの動きを6世紀中頃から後半にかけての時期に限定できるなら、古新田遺跡に隣接する貫名地B2号墳と周辺の小円墳の関わりが重視されるようになる。貫名地B2号墳は出土した土器の年代観から6世紀前半以降と考えられ、4次調査の建物群にかなり接近する点が指摘できる。

このように、広範囲にわたる新たな動きが見られ、古新田遺跡を再度検討しなければならないとなった。余りにも問題が大きいため、今後の課題として将来に委ねることとする。

4次調査の建物群に関する見解は、東北芸術工科大学宮本長二郎教授より直接御指導いただき、記述した。掘立柱建物2の柱跡2から出土した、跡の産地と年代観は湖西市教育委員会後藤健一氏よりコメントをいただき、祭祀土坑の土師器は袋井市教育委員会松井一明氏よりコメントをいただいた。文末ではあるが、記して感謝申し上げる。



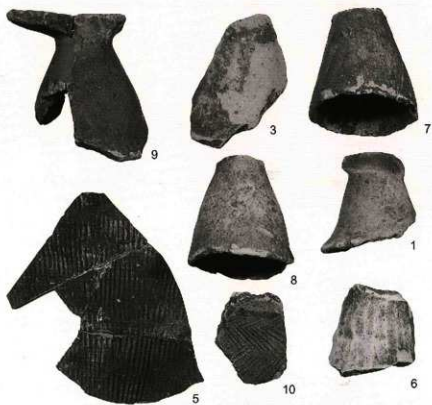
古新田遺跡周辺(西上空より)



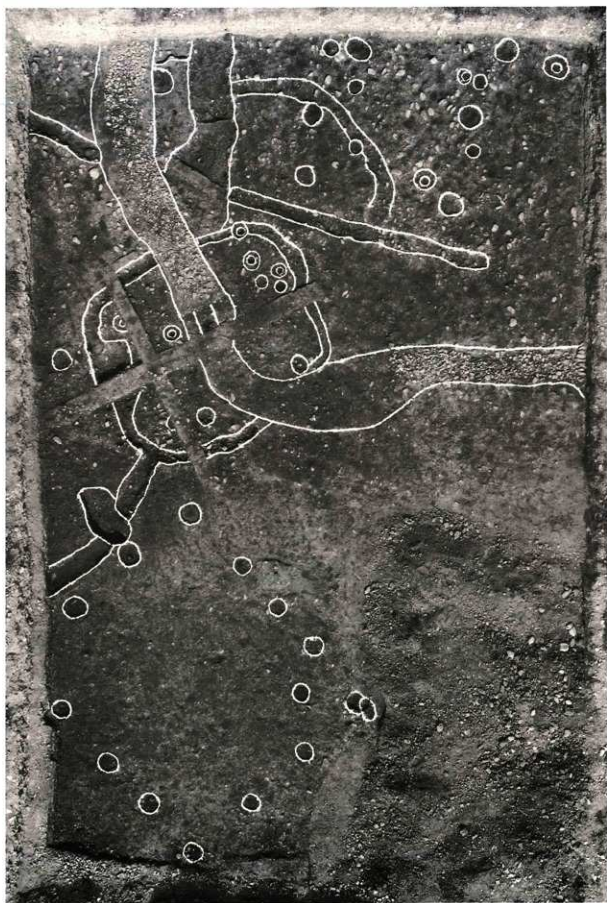
1. 竪穴住居跡1



2. 墓壇



出土遺物



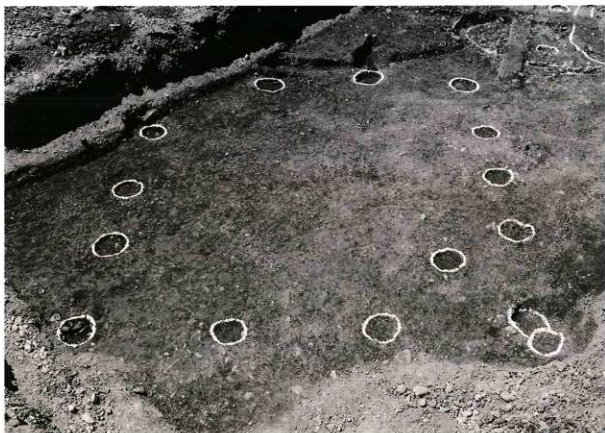
古新田遺跡3次調査区全景(真上より)



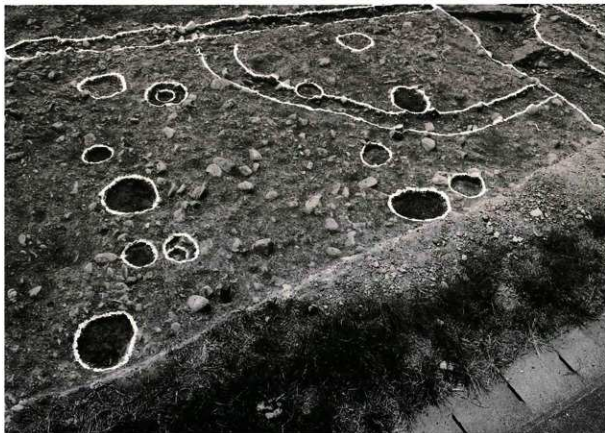
1. 竪穴住居跡1(北より)



2. 竪穴住居跡1, 2(北より)



1. 掘立柱建物跡1 (南より)



2. 掘立柱建物跡2 (北より)



1. 掘立柱建物跡1 柱穴1半截



2. 掘立柱建物跡1 柱穴2半截



3. 掘立柱建物跡1 柱穴3半截



4. 掘立柱建物跡1 柱穴4半截



5. 掘立柱建物跡1 柱穴5半截



6. 掘立柱建物跡1 柱穴6



7. 掘立柱建物跡2 柱穴1半截



8. 掘立柱建物跡2 柱穴2半截



1. 古新田遺跡4次 東トレンチ整地土断面(南より)



2. 東トレンチ整地土除去後の地形(北より)



1. 西トレンチ盤地土断面(南より)



2. 掘立柱建物跡1(南西より)



1. 掘立柱建物跡2 暗渠排水(西より)



2. 掘立柱建物跡2(西より)



1. 掘立柱建物跡1 柱穴1 基礎石、根卷石



2. 掘立柱建物跡1 柱穴2半截 基礎石



3. 掘立柱建物跡1 柱穴5半截 基礎石



4. 掘立柱建物跡1 柱穴7半截 基礎石



5. 掘立柱建物跡1 柱穴8半截 基礎石



6. 掘立柱建物跡2 柱穴1半截 基礎石、根卷石



7. 掘立柱建物跡2 柱穴2半截 根卷石



8. 掘立柱建物跡2 柱穴3半截 基礎石



1. 掘立柱建物跡2 柱穴4半截 基礎石, 根巻石



2. 掘立柱建物跡2 柱穴5半截 基礎石



3. 掘立柱建物跡2 柱穴6, 7 基礎石, 根巻石



4. 掘立柱建物跡2 柱穴6半截 基礎石, 根巻石



5. 掘立柱建物跡2 柱穴1 基礎石, 根巻石



6. 掘立柱建物跡2 柱穴2 根巻石



7. 掘立柱建物跡2 柱穴3 基礎石



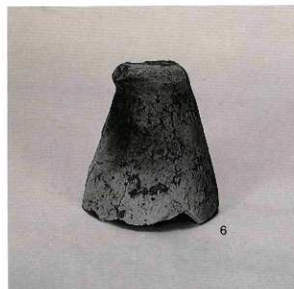
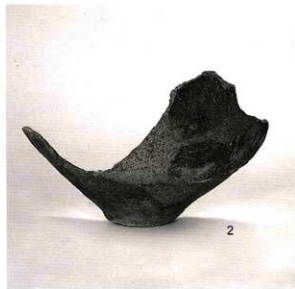
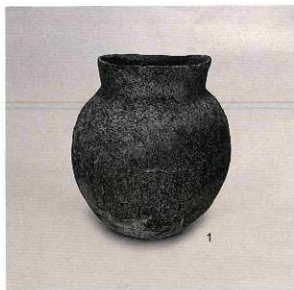
8. 掘立柱建物跡2 柱穴4 基礎石, 根巻石



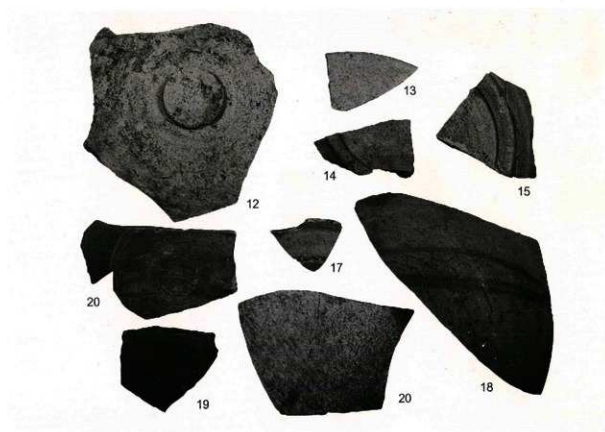
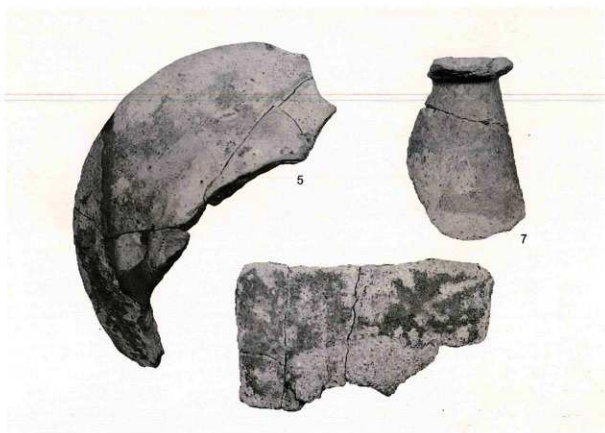
1. 暗渠排水(西より)



2. 祭祀土坑



出土遺物1



出土遺物2



1. 貫名地B2号墳の周辺(背後の学校が古新田遺跡)



2. 墳丘(上空から)



1. 墳丘断面(後円部)



2. 墳丘断面近景(後円部)



1. 墳丘断面部分



2. 後円部周溝断面



1. 4トレンチ



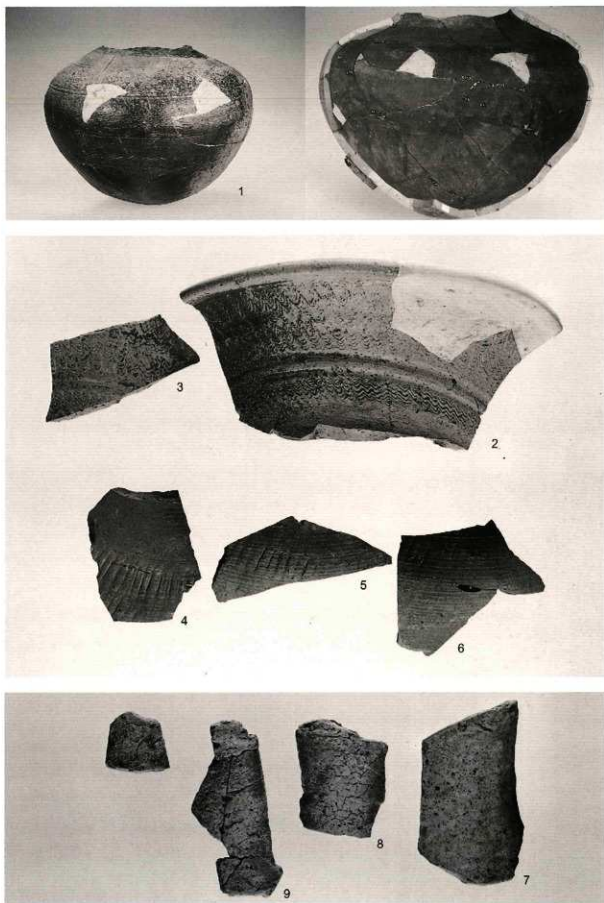
2. 4トレンチ遺物出土状況(左は集石類)



1. 5トレンチ



2. 1トレンチ



出土遺物



1. 高道遺跡1次調査区全景(東より)



2. 土坑1



1. 光徳寺跡トレンチ全景



2. 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あさばちょうないいせきはくくつちょうさほうこくしよ							
書名	浅羽町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ							
編集名	山本義孝、木曾昌司（編集）							
編集機関	浅羽町教育委員会 磐田郡浅羽町浅名1028 tel (0538)-23-2424							
発行機関	浅羽町教育委員会 磐田郡浅羽町浅名1028 tel (0538)-23-2424							
発行年月日	2002年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
こしんでん いせき 古新田遺跡	しずおかけん 静岡県	22481	19	34度	137度	1990年	約800㎡	住宅地 造成
たかみち いせき 高道遺跡	いわたぐん 磐田郡		20	43分	55分	～ 2000年		歩道設置
こうぶく じ あと 光徳寺跡			20					
あきな じ 貫名地B2号墳	あさばちょう 浅羽町		18	00秒	50秒			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
こしんでん いせき 古新田遺跡	居館	弥生～近世		整地土 祭祀土坑 掘立柱建物跡 竪穴住居跡		祭祀用土師器	6世紀代の整地土と 大型掘立柱建物群	
たかみち いせき 高道遺跡	集落	2世紀後半～ 16世紀後半						
こうぶく じ あと 光徳寺跡	寺院跡						6世紀代の全長32m の前方後円墳	
あきな じ 貫名地B2号墳	古墳			前方後円墳		須恵器		

静岡県 磐田郡 浅羽町

浅羽町内遺跡発掘調査報告書 I

2002年3月31日発行

編集・発行 浅羽町教育委員会
印刷 静岡県磐田市二之宮 251
株式会社 山田印刷所
TEL(0538)35-6151
